

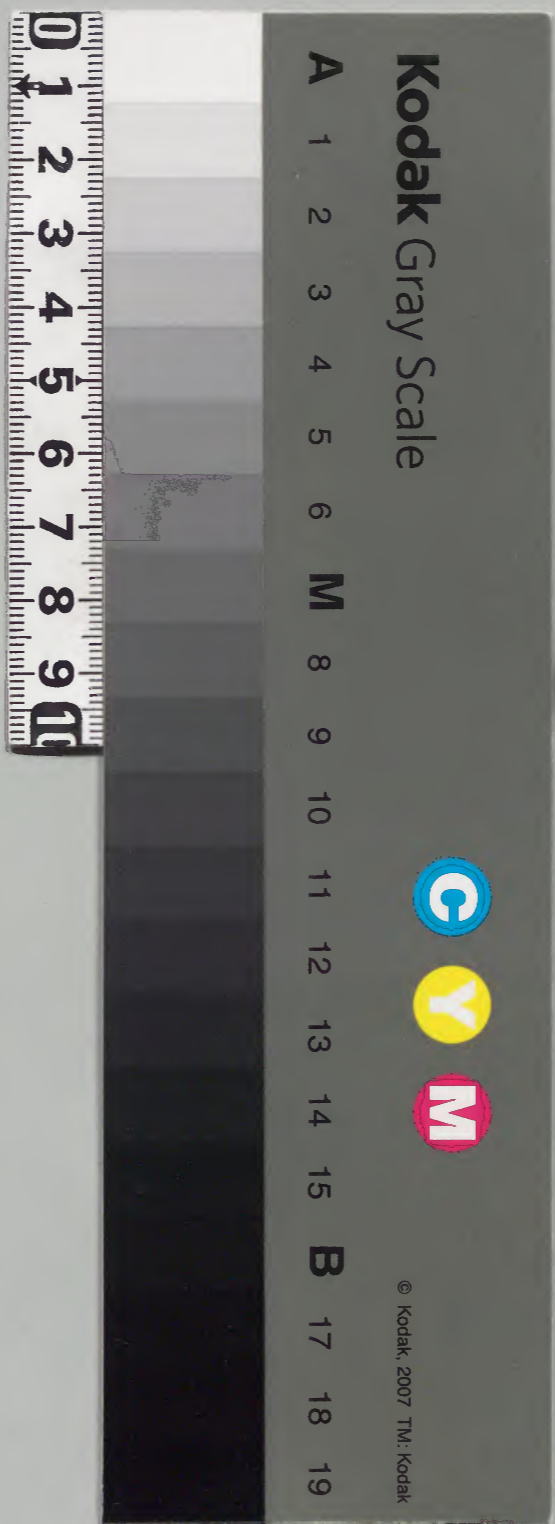
日本書紀傳 三十卷 三

和書  
一〇五二二號

百五

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (114)	
函號	特85	1

内一三六八三號





教部省  
文庫印

圖書  
文庫

高政官  
文庫

高政官

世郷小渡り御在り坐ける御時の御趾ふども有べ  
 く思えて決めて由有げふる御事共ふむ即續後紀  
 小嘉祥元年十一月丁巳朔壬申隱岐國伊勢命神預明  
 神例縁屢有靈驗也之所見たり考證小今在敵村或作  
 汲村又久美村之辰已  
 山麓号伊勢明神云り此を五瀬命ふめりふども云ハ  
 甚じき僻事あり又傳十二卷五十三丁十三卷六十四  
 丁小注るが如く知夫郡比奈麻知比賣命神社御在り  
 坐ハ謂ゆる岐神の御事かして大己貴神の國作の御  
 時ハ伴奉りて給ひて彼葦原中國小在り邪鬼を言  
 向て御在り坐す御功を即給へりし神ふて渡りて  
 給へる事ふどんて大由縁此より山陽道の國々の事  
 有る事のみぐ多りける  
 小及ぶす可く播磨國の事ハ風土記小傳りて出雲國  
 丹後國小次てハ殊小委しく傳りれるふむ甚美たり

和日林書紀傳三十

〇百二十三

一六八三



御事ありける其大己貴命少彦名命二柱神相並び御  
在り坐て國巡り作らせ御御在り坐ける御事少くハ傳  
廿九百十注せれども其時未此古風土記を見ぞ  
りけれハ得ふ注し敢ざりけるを此所を書す今日  
不至りて伊勢人の許より一本を贈來りけれハ讀見  
て直小説を成す事不及びてハ實ハ神助有る事を思  
えて甚辱しも何と云知ず甚嬉し可可就てハ先  
小説漏せりハ二柱神の事實共ハ此ハ併せ注す可可  
あり甚煩し思しも其前後の差別ハ自然ハ見分可事あり  
けれハ其混れ無しびし先神名式ハ云ハ明石郡林

神社ハ同記揖保郡條ハ林田里林名淡土上中所以称  
淡奈志者伊和大神占國之時御志志植於此處遂生榆木  
故詳名淡奈志ハ有る淡奈志ハ決めて波夜志の誤ハ  
る由ハて先ハ唯ハ林ハ云けるを後ハ林田ハ云ハ  
ふる可ハ伊和大神ハ申すハ神酒輪大神ハ申す事ハて  
即大己貴神ハ渡ハせ給ふ御事百七十ハ云べハ石  
國ハ此記の文法ハて外ハて治國ハ書ハ所ハ用ハひた  
り國斯良志須ハ訓ハべき所ハ事其說傳廿九百七十  
ハ注ハが如ク即國土を修理固成ハせ給ふ御政を申  
すあり然ハて此林神社を伊和大神ハ今定ハむハ次



伊和都比賣神社御在し坐るふ思合せしるればふ  
 り即明石小林浦と云有り又中莊と云ふ岩屋社とて  
 立せ給へるハ必右の二神の社あるふこり有けめ但  
 其右岩屋社と聞ゆるハ傳十五淡路國津名郡石屋神社を移  
 奉れりと言然れども元よりの伊和社ハ石屋神社  
 を合祀りてより言の述き仕ハ伊和の言ハ隠れて岩  
 屋の名のみを人皆知る事ハ成ぬじり又赤穂  
 郡伊和都比賣神社と申すも有り其ハ下百五十云  
 てむを合せて見て曉る可くふむ予此播磨風土記を得  
 安政六年十一月廿三日庚子ありて此説を立る今日ハ  
 所以ハ學問の辛きと學者の心狭きと小殆ふ懲竟

今云ふ予が門人の  
 参宮せる便

述懐あり近頃世ハ出珍しく此記ハ丹後  
 風土記ハ新撰字鏡と字鏡集と大同類聚方との五部  
 あり堂上の御家本を寫し得つを江戸小松と云  
 年秋の頃ハ黒川春村の手ハ入なりと聞たれども  
 未知る人ふざれば求るハ由無くて有しを伊勢人  
 八羽光穂の許ハ伊豫國矢野玄道と云者参宮の序ハ  
 其事を語たりと聞て長門國白石資興ハ詔へて京  
 小令求たり一人ハ不知れり云人無しハ空しく  
 歸る由を京より遺せたりとて光穂も我も共ハ力  
 を落したる去年十一月ハ有けむ筑紫より歸る  
 さ六人部是香許立寄て見せたり其寫を得せむ  
 と契置て下りつる梅戸美延ハ花山院殿の御内  
 人ハ予とハ交り深かりけれ此人不語む置つ  
 るハ其男ハを遺して懇ハ求るハ其契を違へて終  
 小借成りハ美延種ハ活きて丹後風土記ハ鈴  
 鹿連胤より借得て寫取て十月十三日ハ下事  
 ぬ然るハ此記ハ谷森ハ云せけり未世ハ出下事  
 を許さずとて兩人共ハ因辭びて爲げ様無しと云  
 遺せたり若て大同類聚方の神社と姓氏ハ用有て

〇日本書紀傳三十

〇百二十五



△二卷ハ幸以前  
借テ漸ク買持テ  
りけれハ其次を  
云けるカ

佐藤某が板本小為を借遺たりけり  
八迄五冊を一日一冊宛日毎取替て借たり見  
訖りて其末寫本方を見ま欲く成て借たり  
けり小見セテ其神社と賜物をとて其報實ハ右の丹  
云けられ其た小辱き賜物をとて其報實ハ右の丹  
後風土記と秘庫器録を寫させ十二月朔日を限  
りて相換べく云契り其日ハ此十九日あり若  
春村より借て寫持りて此記を見せけれバ借賜  
てむやと云ける此ハ世の秘物あり借て春村を  
欺くふ當れり云り義ふ於て犯させむ快うさ  
りけられ二三説を抄録して右九十五丁以下女  
の許より贈來れり然る小右の隱岐國の説を今日書  
て播磨國の事を注さむ如何ハ為思煩ひつる  
御賜物と辱し尊に頂て讀奉りて今夕より此の説ハ  
ハ及べりあり此小就ても學者の腹悪きを甚く悪む  
可く成ふたり予天保十四寅年十一月秋田小平田翁  
を慕ひて下りける翁の七ふりて五十日小當る  
日あり遠路慕行たる事ふれバ其四日名薄の代り

△予をして翁存在  
の門人として其注す  
所を翁より受かり  
て云む奸策有て  
予が此注す事を  
翁の盗説ふとい  
其黨相競ひて云  
事ふれども其ハ  
後人の眼不在事  
ふれバ敢て心も係  
ざりつるカ

祝詞一卷を捧げて師と仰ぶ事鐵胤して申させ  
たり但古史成文を編て正史を廢し天狗妖狐の奇  
談怪説ハ其時より信ハざる事ふて已小其囑時より  
云破つる小其頃平田ハ衰の盛ありし時ありけれ  
予の對して争が事ハ無り然る小近く此御紀  
の傳を書ふ至りてハ又其偽學ある事を辨正して  
爲ふ又止べり勢ハ成ふたり師弟の私を捨て天下の  
終小交を絶べく言遠せたりけれハ又翁の門を出さ  
る小及べり但此紀傳も若干小借ハれバ予が今説  
翁の前説と成て古史傳とやふハ依て去年の旅行ハ  
亦多り可し其平田黨の茶毒ハ依て去年の旅行ハ  
も己カ危き事ハ途なる事ハ度々ありき今漸ク思ハ  
バ京人の此記を惜めるも亦其餘毒の循環れるあり  
けり死て學問ハ天下の爲ハハ爲べき事ありけ  
れ書を秘して見する事を壓ふハ他小善説の出來る  
を妬む婦女子の心より起れる拙き事あり紀記の如  
きハ天下小遍く見る書ふれども其學其位小至り  
人ハ讀説く事の難きハ非ずヤ彼書を漫小秘好  
人共ハ徒小文庫ハ虫食ゆるのこ小絶て其説を貴

○日本書紀傳三十

○百二十六



さて得る人ハ恐らくハ天下舉りて無くと云とも強  
説ハ非る可く唯ハ神皇の御為ハとて學ふ人ハ無  
くて名を求る可く利を欲する賀古郡日岡坐天伊佐ニ  
のニハ過ざる可く思ゆる賀古郡日岡坐天伊佐ニ  
比古神社ハ先地名より説べし記ハ望覽四方云此土  
丘原野甚廣大而此丘如鹿兒故名曰賀古郡狩之時一  
鹿走登於此丘鳴其聲比ハ故号日岡と有る此上文關  
て今考ふ可くす雖も右の鹿賀古郡の説ハ彼應  
神天皇御紀の鹿子の故事ハ別あり其揖保郡香山  
里本名鹿上下上所以号鹿來墓者伊和大神石國之時  
鹿來立於山岑是忽似墓故号鹿來墓略と有る合せ見  
小若くハ伊和大神の故事ふじも知べりうごるふ

り故其天伊佐ハ比古神ハ少彦名神ハ御在り坐す由  
ハ古事記訶志宮段ハ故建内宿祢率其太子中於高志  
前之角鹿造假宮而坐其地伊奢沙和氣大神之命見於  
夜夢云以吾名欲易御子之御名中故亦稱其御名号御  
食津大神故於今謂氣比大神也と有る此ハ紀記共  
小混ハハハ事有る今此を正す小氣比大神と申す  
ハ本より其地ハ御在り坐す保食神ハ即御食津大  
神の御事ふを御名易の幣ハ入鹿魚を太子ハ奉り  
せ給へるハ血浦と云ふ言の起るるを其時ハ御食津  
大神と稱奉れる由ハ書されふハ中ハ中ハ誤傳り若てハ



て天<sup>右</sup>の伊奢沙和氣大神將其氣比宮小御在り坐す神  
 あり若て其御祖息長帶日賣命の待酒を醸て獻りて  
 給へる御歌小許能美岐波和賀美岐那良受久志能加<sup>神</sup>  
 美登許余迹伊麻須伊波多多須須久那美迦微能加牟<sup>神</sup>  
 菩岐本岐玖流本斯登余本岐本岐母登本斯麻都理許<sup>奉</sup>  
 斯麻都理許斯美岐叙阿佐受衰勢佐ニと有る此御歌  
 小相照して見る小伊奢沙和氣大神ハ少御神の御事  
 ありけり儲氣比神宮の社傳小攝社伊佐く別神社保  
 食神の荒魂を應神天皇の祭給へるありこと云るも伊  
 奢沙和氣大神ハ氣比の本社ふぬ證あり但其荒魂

合<sup>八</sup>台<sup>五</sup>小石等の御  
 事<sup>十</sup>を委<sup>十</sup>しく注<sup>甲</sup>  
 ちを見合す可

社小眞彼伊佐く別神の少彦名命を合せ祀れる者ら  
 儲天伊佐く比古神社を寄相記ふ少彦命と有る少彦  
 名神の亦名と所見たり但石の日岡の説ハ其神前郡  
 條小都麻里云比也山者品太  
 天皇狩於此山一鹿立於前鳴聲此天皇聞之即止翼  
 人故山者比也山野者号比也野と有れば此應神天皇  
 の御時りとも聞ゆ然れども但古事記黒田廬戸宮段  
 小大吉備津日子命與若建吉備津日子命ニ柱相副而  
 於針間氷河之前居忌菟而針間爲道口以言向和吉備  
 國也と有ハ其以前の事あり小岡小日岡と云ひ川小  
 氷河と云るハ己き事と聞えたり然して右の賀古郡  
 の説も御紀の方正しと思ゆれば右の二説共小風土  
 記の方ハ土俗の傳ふて一説ありむも知べらるる予  
 が意ふハ氷河ハ出雲の簸川の名を移せるふて武藏  
 國の氷川と其出自同ト儲又和名抄小印南郡大國於  
 爾郷有り風土記小此里有山名曰美保山云く又大國



△を神社考引るハ八十橋者陰陽ニ神及八十二神之降迹也又見えたり矣傳ふり又

里美保山ニ西有原云々と有ハ一ハ息長帯日女命の御廬の故事あり一ハ弓削大連の被造たる大石の故事ハ一も正しく大國主神の御名を負る地ふる事上件諸國の例共を云る以て知べきあり又益氣里此里有山名曰斗形山以石作斗與斗氣故曰斗形山有石橋傳云上古之時此橋至天八十人衆上下往來故曰八十橋と有以此事を續風土記に云物ハ伊弉諾尊伊弉册尊八十二神共ハ天降給ふ跡ハ一有ければ八十橋と云ふ一説ハ彦名命大己貴命とカを合せて造給ふと云

△右の詠主の生石室に似たる事有り共勝磨郡貽和里の文小生石大夫為國司有之と云事有る若同ハ人カシヒ小此人ハ此石寶殿を志都乃石室と心得誤りて詠れハ古より其混れハ有る者を見ゆ務れども

ふと有る一説の意を考ふる小大己貴命ハ彦名命の當昔八十橋ハ一も猶梯立の状ありつゝむを此二柱神の侍して山と成し給へる者と所見たり諸石の大國就て思出けりハ万葉三巻ハ石村主真人歌ハ大己貴命ハ彦名命乃將座志都乃石室者幾代將經と有る此志都乃石室ハ石見國邑知郡の山中岩屋村と云ふ有る由傳ハ九卷百六十一丁ハ己ハ注るガ如シ然るハ今其地ハ石寶殿と云有て里ハ此を生石子明神と稱へて祭る事ふるガ今此風土記を見れば大國里美保山ニ西有原名曰池之原ニ中有池故曰池之原ニ南有作石形如屋長ニ丈廣一丈五尺高亦知之名号曰大石傳云聖徳王御世弓削大連所造之石也と有る此弓削大連ハ志都乃石室と云來れる誤此ハ於て顯ハれたり但此ハ右の二神の御形と爲て祭來るも久しき事ハ此名作主ハ然る事ハ今更ハ其祭祀を廢行ハ甚有るト云事あり今世我ガ皇學の年月ハ開行ハ



△天下の人望を失ひて

△又そ有る事思ふて

就てハ如此く珍しく書も追次ひて世小頭ハ多  
事ありけれバ古人の誤も自然小見え行々事ふるを  
學者の僻として忽小昨日迄祭來し神をひ今日其  
非を正したりとてむけく廢て顧る者も無きハ余小  
輕くしき事あり引削大連の作れり坐て其祭祀を享  
室バ小祭る時ハ神靈の依り御在し坐て其祭祀を享  
させ給ふ小非ズヤ況て此ハ古より今に至る迄ハ朝  
家の御為天下の為ハ佛法を作け逆臣を誅ハいと爲  
天地ハ貫ぬく忠臣ハ御在し坐て其忠を此ハ何の爲  
令作れぬハ知れども古く生石子明神ハ申し  
て此を祭奉るハ何れハ石の二柱神等の御在し  
坐せしむ唯其本の志都乃石室の石見國ハ在る事を  
知れしむ此石室殿を遙拜所ハ心得て祭らむ事何  
うハ苦しくりぬ可き今ハ朝命ハ違背奉り大戎ハ和  
上ハ御在し坐しむハ朝命ハ違背奉り大戎ハ和  
親しむ天地開闢以來の大柱事ハ絶て有らむ  
む者と思へハ坐し泣ぐりて此石室ハ大連公の御  
靈をも併て齋仕奉ら將欲てふむ後世ハ此地  
の守ハ拜れて宰と有し人猶能心爲ら可き事ふる

和名抄ハ饒磨郡英賀加郷有り風土記ハ云く英  
賀里<sup>上中</sup>右称英賀者伊和大神之子阿賀比古阿賀比  
賣二神在於此處故因神名以為里名と所見たる伊和  
大神ハ例の大己貴命の御事あり此二柱御子の御祖  
今考ふ可くごさあり伊賀風土記ハ猿田彦神始此  
國属伊勢加佐波夜國時二十四萬歳知此國英猿田彦  
神女吾娥津媛命四神之御神自天上投降給之三種寶  
器之中金鈴知之守給其知守給之御齋處謂加志之和  
都賀野今時謂手拍者此其言訛也又此神之依知守給  
國謂吾娥之郡其後清見原天皇御宇以吾娥之郡分爲



國之名と有を引て思ふ石此小猿田彦神と申すハ事  
代主神の亦名あり吾娥津媛命其御女と云ハ傳の誤若此と同一ハ二神共  
小此小伊和大神の御子と有や正しくし其ハ右小  
始小猿田彦神云し知此國矣と有を承て下小又此神  
之依知宇給國謂吾娥之郡と有ハ猿田彦神の御事小  
係なる文あり然る時ハ其神小吾娥津彦神命の御名御  
在し坐て吾娥津媛命小並ふ時ハ專御兄弟の狀ふる  
あり若て後小伊賀と云ハ吾娥の轉ふる小清和天皇  
實録小貞觀六年十月十一日 授伊賀國正六位上  
伊賀津彦神從五位下と見ゆ其を本小復す時ハ吾娥

津彦命吾娥津媛命して吾娥ハ其知せる地名ふれば  
此の阿賀比古阿賀比賣二神ハ其同神ふ林田里條じく敬祭とハ  
云あり其ハ揖保郡林田里條小所以名伊勢野者云在山岑神  
伊和大神子伊勢都比古命伊勢都比賣命年自此以後云  
こ即号伊勢野伊勢川因神爲名と有て彼伊勢風上倭姫命世記小  
謂ゆる伊勢津彦神も此國小御在し坐小准くへて思  
ハじ其疑無る可うむ者あり陽成天皇實録小  
元慶五年五月五日壬子播磨國正六位上英賀彦神英  
賀姫神並授從五位下と有ハ右の阿賀比古阿賀比賣  
二神ふる可う式社してハ御在し坐ざるあり今も  
英賀



村又英賀川と云有り御社ハ今ハ八幡宮と云牛頭天  
王と云非ぬ御名小易りけめども石の英賀村小御在  
比賣神の御名小負せる阿賀ハ阿賀の略ふる小  
御祖神の御名を取れる小や同記ハ完粟郡阿賀山  
伊和大神之妹阿和加比賣命在於此山故曰阿和加山  
と有る是より若て石小引る明石郡伊和都比賣神社  
の伊和都と阿和賀と等しく阿和賀ハ阿和處より伊  
和都の都處の義ふるハ唱小正訛有と雖も其義小  
於て異ふるざる所有り然れハ阿和賀より約りて阿  
賀の言を成せる者ふる又同郡伊和郷ハ完粟郡小  
事決くふむ思えたる  
伊和郷有り其來由ハ風土記小伊和里船波丘琴丘  
道丘藤丘稻丘鹿田土中上石号伊和部者積ミサノホリ嶮郡伊和  
丘大丘甕丘筥丘  
君等旗到來居於此故号伊和部所以号手苧丘者迹國  
之神到於此處以手苧草以為食薦故号手苧一云韓人

等始來之時不識用鎌但以手苧草故云手苧村昔大汝  
命之子大明命心行甚強是以父神患之欲省棄之乃到  
到因達神山遣其子汲水未還以前即發船遁去於是火  
明命汲水還來見船發去即火ホテリウミナリ瞋怒仍起風波追迫其船  
於是父神之船不能進行遂被打破所以其波丘琴落處  
者即号琴神丘箱落處者即号箱丘梳匣落者即号匣丘  
箕落處者仍号箕形丘甕落處者仍曰甕丘稻落處者即  
号稻牟礼丘曹落處者即号曹丘沈石落處者即号沈石  
丘網落處者即号藤丘鹿落處者即号藤鹿丘大落處者即  
号大丘螿子落處者即号日女道丘尔時大汝神謂妻怒



都此賣曰為遁惡子返遇風波被太辛苦哉所以曰臆鹽  
曰若濟之所見たり此伊和里の下小十二固有を下文  
小照見小曹丘沈石丘の二丘落たり又下文小ハ船  
丘の名漏たるふて都て十四丘ふるが伊和ハ郷名ふ  
ウ石の十四丘ハ伊和郷の内の小名あり石号伊和部  
者有ハ次ハ積嶮郡伊和君等到來居此故号伊和部  
有る積嶮郡ハ完粟郡を云ふ伊和君ハ當國の三輪君  
ある可ハ峯相記小其伊和社の御事を欽明天皇治廿  
五年託伊和恒郷云可朕於此地蓋有上代之幽契哉云  
云云云神託を載たるを見小本郡伊和郷小其伊和

△但此小少ハ考有り  
下百七十完ハ郡整  
村の事ハ就て洋子  
可

氏の住たりし事知る然して其伊和君等旗の來て  
此を住居と爲りしより伊和部と云ふ其部ハ右の等  
旗の聚を云ふ其部を省きて伊和郷と云事と成  
れる其以前ハ右の十四丘の地を合せて手苜丘と  
云ありけり其手苜丘の故事ハ近國之神到於此處  
以手苜草以為食薦と云ハ大己貴神の御許ハ隣國の  
諸神會集して食薦を編て仕奉りけりふめり二説ハ  
上古ハ韓國ハ未録を用ふる事を知ざりし事ハ引付  
て云者と聞ゆれ取今も姫路の近傍ハ手柄山と  
て有ハ右の手苜丘の名の遺れるふめり若て此手苜



村小其伊和部の來住り、欽明天皇の御世、此  
時其伊和坐大名持御魂神社を此山も移奉れる者、  
見ゆ神社啓蒙、惣社在、饒磨郡姫路祭神大己貴命額  
云軍八頭正一位惣社伊和大明神按鳥居彫刻傳聞當  
社者以大己貴命奉崇云云里諺云七月既望兵士會聚  
爲軍旅之威儀云古老相傳云欽明帝御宇師安元年六  
月十一日當願社影向也、稱一國守護者天平寶字年中也  
又按客相記云天平寶字八年異賊襲旅即遣藤原貞國  
追討云々恐者當社貞國凱旋之日祀焉、有即今姫路  
城内小在る惣社是あり、  
右の鳥居彫刻の文小欽明帝  
師安元年と云ハ彼伊和社説

小其社の御事を欽明帝師安元年甲申二月十一日始  
顯座と云ると同年あり、此天皇元年ハ庚申あり、  
申ハ廿五年小當り可し、若て其年伊和恒郷ハ完栗郡  
小在て本社小仕奉り其等族の子蒨村小徙れるハ此  
小其遙社を造て氏神と爲て仕奉れり、事を云ふ、  
り然して稱一國守護云々、和名抄小播磨國國府在  
饒磨郡と見え、たれハ國衙小近く惣社を定め、一國  
の神を祀る事、右の伊和社小合せたる故、惣  
社と定めて仕奉る事を然云ふ、可し、若て當社ハ  
右の如く古き御社、ふれども此を惣社と被定たり、  
ら官帳小載り、右小大己貴命之子大明命と有ハ  
せ給ハざるあり、  
此より外小絶て見ざる事あり、又其御祖、  
も更小考ふ可く、據無きを今強説爲てむ、先御祖  
の能登都ハ能登の如く、能登神名式小能登國能登郡  
能登生國王比古神社ハ傳廿九、百十ハ下、百十注、百十ガ如く大



國魂神の御事ふて渡りせ給へるふ其同し國名を負  
ひて能登比咩神社御在し坐す是即離れぬ御由縁御  
在し坐す女神小坐す事を知べし若て其能登ハ瓊音  
の義ふる小て沼河比賣命の御名小由有と思けれ  
ハ此のハ都比賣を姑く其神と定めて見ハ火明命の  
説又此小因て出來る事ありけり若て出雲風土記ハ  
島根郡美保郷中所造天下大神命娶高志國坐神意支  
都久辰為命子俾都久辰為命子奴奈宜波比賣命而生  
産神御穂須く美命是神坐矣故云美保と有を地神本  
紀ハ大己貴神次娶高志沼河姬生一男兒建御名方神

坐信濃國諏訪郡諏訪神社と見えて即御穂須美命と申すハ眞  
火進命と申す事ふて火の物を焚が如く御心の進り  
りハ御在し坐す謂あり又火明命と申すも怒る事小  
面ガモ火照ホテシと云が如く其切き時ハ御心一速く御在し  
坐ける故の名ありけりハ天孫降臨章ハ火明命火進  
命の御名の出たるも其鹿葦津姬命の御怒の猛り進  
むハ隨ひて其無戸室ハ焚く火の明り進む小因れ  
る御名ふる小思合す可し此小も御父母二神す  
小置て遁れこせ給ハむと爲こせ御在し坐ける程の  
御事ふる以ても其大抵ハ知る事あり因達神山ハ  
下九百五十五ノ注ヲ考合テ可シ



謂ゆる迎達伊多郷是あり次ふ云べし右の大臙怨の  
火字ハ大を誤れるうとも思へれども大臙命の神名  
ふ合せ思ふふ富傳理と訓べさう所以其波立と有る  
其波立との間ふ脱文有べし例ふ依ふ所以其舩破處  
者即号舩立浪波起處者即号波立ふと有べき爲道  
惡子返遇風波被太辛苦哉所以号曰臙鹽と有る此臙  
鹽ハ嚴潮播磨と續く發語の本ふて彼神風伊勢と云  
も彼伊勢津彦命ふ起れると同く可く曰苦濟ハ  
本ふ曰告齊と有れども何右ふ被太辛苦哉と有る照  
して考ふるふ如此くふてハ聞えざる所ふるが故ふ

今改め引り儲辛苦ハ寶鏡開始章第三一書ふ多斯那  
牟と訓れハ苦濟ハ多斯那美能和多理と訓べさふや  
仁徳天皇十六年御紀播磨國造速待が歌ふ滋箇始報  
破利摩波椰摩智と有る釋ふ三日潮也私記曰三日之  
潮其沈急速故欲讀早待之發語置此言乎と有る諾ひ  
居りし事ふんども己ふ其伊加理志富の本説を得て  
ハ取らざりし事ふんども己ふ其伊加理志富の本説を得て  
いさ者ありけり石の火臙命を健御名方神ふ當て見  
ふ古事記國邊段ふ天神御便ふ對奉りて其建御名方  
神千引岩擊乎末而來言誰來我國而思ふ如此物言然  
欲爲力競云と有る如く其始ハ一速き神ハ御在し  
坐けられ此ハ御父母神の御舩を覆し奉る程の御事  
の御在し坐又同抄ふ穴無之安奈迎達伊多郷平野此良周  
知の四郷有ハ皆大己貴神小由縁有る地名共あり穴  
無ハ風土記ふ安師里土中右稱安師里者倭穴無神戸



公大同元年の  
 新抄格勅符  
 穴師神五十二戸  
 と有る分書  
 小大和五戸和  
 泉八戸播磨  
 廿九戸と有て  
 和泉八神名式  
 小和泉郡泉  
 穴師神社二  
 座と有れ其  
 地あり可く此  
 ありハ殊ハ多  
 きハ決めて有  
 所由有る可  
 備具

託仕奉故曰号穴師と有る倭穴無神傳廿九百十八  
 八小注せるが如く神名式小大和國城上郡穴師坐兵  
 主神社名神大月次と有る是ふて即大己貴神の八千  
 相嘗新嘗  
 女神と称奉る方の御名を以て崇奉りて彼謂ゆる平  
 國之廣乎を以て御功を立させ給へる方の御靈ふふ  
 び渡りせ給へりける然して其神戸々仕奉る事も少  
 縁の所由ありざりけるふや假字風土記小神功皇后  
 三韓御退治の御時略中佐野莊麻生山小御登り天神地  
 祇を一七日御祭有る麻生山を此時迄ハ葦男山と云  
 ふ神代より大己貴命御鎮座の山なる故大己貴命の

御別号葦原醜男を略し山名と爲る略中弓弦を求む  
 と勅有る大己貴命の神託として一夜小葦男山小  
 麻生し故ふ後小麻生山と云ふ号す神功尊弓弭ふて此山  
 の巖を穿給ひし所を泉出の清水と云ふ鳴動石とも  
 云ふ今地震の前表小鳴ハ清水岩あり岩の隠れたる  
 下小岩の重り動く事有り古記小播磨の由須流の山  
 谷と云ふ是ふる由字小石動山と書あり此所小後小  
 八幡宮を祝祭れるふや八幡屋敷とて峯の平地小跡  
 有り彼麻生を晒し川を葦川と云ふ後小小川と云  
 小略中大己貴命穴無の沖おて神功皇后小託し給ひ西



國へ供奉の御告有り川の瀬早く吹立くくども群卒  
 損船無し穴無村小速川社とて尊崇す麻生山の西の  
 川おとて水を引て山を穿ち神田の洞溝を令掘給ふ  
 懐田カムダの井と云ふ今兼田と云ハ誤ありとくや略又木  
 庭村八重岩ハ神功皇后麻生御止宿天神地祇の御祈  
 の時大己貴命御現座の所あり同村楯岩とて木庭山  
 東方一及面程岩有り神功皇后御弓御試の楯岩あり  
 略と有ハ古傳あり神功皇后より以前ハ葦男山の称  
 有て神代より大己貴命の御鎮座の山と傳へ又穴無  
 の己貴アノハチの謂ふるふぞを思へハ然る上古の神地なる

故小倭穴無神の神戸小寄奉りて神体をバ大和  
 小て被祭る故小此ハ然る神社の御設ふどハ非り  
 ける小こり其麻生山の古名葦男山ハ此穴無郷と所  
 云ハ又神在山と云ふ今御著山ツツミの山村より  
 六七町辰己の方と云り此ハ麻生山の所在を思ふ  
 可く又近隣ハ幡予神鈴を立給ふ予の立ハ所ハ山脇  
 村の山と云ふ所ハ鈴野と云ふ山脇村の東と云ハ  
 西あり幡の立ハ所を幡野と云ふ山脇村の西山の麓の  
 御馬を繫ぎハ所を鞍淵と云ふ今山脇村西山の麓の  
 川淵ありハ流の幡の如く慶雲の瑞有ハ所を幡下山  
 と云ハ御陣の所ハ所を姫野御前構山と云ハ印鑰の  
 落止りハ所を印鑰大明神と云ハ山脇村小祭る麻積の祖  
 望志臣命小命ハ所を印鑰大明神と云ハ山脇村小祭る麻積の祖  
 有可ハ天孫本紀ハ所を印鑰大明神と云ハ山脇村小祭る麻積の祖  
 神此を云ふ所ハ所を印鑰大明神と云ハ山脇村小祭る麻積の祖  
 祀ハ皆宗像神小御在ハ所を印鑰大明神と云ハ山脇村小祭る麻積の祖



△ハコガ神代より草  
男山ハコガ御在り坐す  
御霊ハ次云ふ射  
楯兵主神社ハコガ合  
祀る者ハコガ所見た

屋敷とて麻生山ハコガ在りハ其三女神を玉姫命ハコガ申奉  
りてハ幡神ハコガ御在り坐て即大己貴神ハコガの后神ハコガ渡り  
せ給へハ此ハコガ御在り坐り其時ハコガ祀奉給へハ石の  
穴無村ハコガ御在り坐り速川社ハコガ其時ハコガ祀奉給へハ大  
己貴神ハコガ御在り坐り給へハ其時ハコガ祀奉給へハ大  
御著村ハコガ云驛の近村ハコガ見たり故其迎達郷ハ風土  
記ハ因達里ハコガ右稱因達者息長帯比賣命欲平韓國  
渡坐之時御船前伊太代之神在此處故因神名以為里  
名と有る此因達里ハ右ハコガ百三十ハコガ引る伊和郷の文ハ  
昔大汝命云く到因達神山と有て此山ハ御兄五十猛  
神の敷坐す御山ありつらむ事傳十七ハコガ九ハコガ下ハコガ己ハコガ注  
の御時の文ハコガ此ハ伊太代之神在此處と云ハ古より此ハ  
御在り坐ける謂ふるがハコガ其御船前ハコガ御立ハコガ御在り坐て然る  
神威を顯ハハコガ御在り坐ける

ハ因て遍く里名と成れるありけり偕此神威の御  
事ハ右ハ引る假字風土記ハ神功皇后三韓御退治の  
御時當國福泊の沖迄御船來る雨降り暫時晴間と勅  
有る故ハ晴間國ハコガ云ハハ風の吹止り所を吹留ハコガ  
云ハ今福泊と云ハ又當州を晴間國と云ハ偕佐野  
麻生山ハ御登り天神地祇を一七日御祭有る麻生山  
を此時迄ハ葦男山と云ハハコガ以下已引中略御試ハ御弓を引給  
ふ的を立給ふハ印南郡の内あり初矢此的の邊ハて  
虚矢ハコガ成り落り所を矢落村と云ハ今鎭西郡安寶郷  
ありハコガ号新在後矢落村より北へ行り所見たり此所ハ



古神社有り射楯兵主神とて二座大己貴命五十猛命  
あり同郷中村に祭る其時分ハ矢落村に祭り  
式ハ二の矢ハ餘戸莊青山村に留り坐す射目崎明  
神と崇祠す古記ハ青山村夢崎川の所昔伊留米崎明  
告有しと云傳ふとあり射目崎川あり可ハ夢崎川  
抜給ふ故ハ破岩明神と云ふ大市西脇山を云と或記  
近所の山ハ立ハ割れハ石有り是ふる大市中村の  
可ハ其上西殿の氏神ハ八幡宮と云り云しと見えた  
り其的を建給ふハ印南郡の内ありと有ハ右ハ引  
る此下文ハ又木庭村ハ重岩ハ神功皇后麻生御止宿  
天神地祇御祈の時御現座の所あり同村楯岩と云て

三代實録ハ貞觀十  
年閏十二月廿日  
授播磨國正六位上  
射目崎神從五位下  
と見ゆ

木庭山東方一反面程の岩有り神功皇后御弓御試の  
楯岩あり又五壇山ハ三韓退治を祈給ふ由山の廻  
ハ花壺有りと云る是あり今木庭村キバ的方村マトガタムラふと云地  
有り右の如くハ式ハ謂ゆる射楯兵主神社二座ハ固  
より因達神山ハ御在ハ坐ける五十猛神と宍無郷の  
葦男山ハ御在ハ坐けるを此ハ合せ祀りて二座ハ被  
爲なるハ神功皇后の此神威の仰奉りて給へる御時  
よりの御事と所見なり儲神功皇后の右の楯岩ハ  
達神山ハ御在ハ坐す神を伊太代之神と申すハ射楯  
と聞え又大己貴神の宍師ハ御在ハ坐す御魂を兵主  
神と申奉るハ故ハ其二神ハ誓言奉りて給ひて三韓御  
征伐の御祈の御爲ハ忌矢を放ちて其軍の勝敗をト



問奉りて給へるあり猶此神社の御事ハ傳廿七卷七  
十九丁小己小注奉るを其時未其古風土記を見ざ  
り以前ありが故此と意味異なる所有れば照し  
讀て其正を撰ぶ可し此神社を今の廣客社と云ハ無  
下小拙き其平野郷ハ風土記小枚野里所以稱菅丘者  
大汝少日子根命與日女道丘神期會之時日女道丘神  
於此丘備食物及筥器等具故号菅丘と所見たる此菅  
丘ハ右百三十一丁小引る伊和里の文小箱落處者即号箱  
丘と有る其ハ伊和郷の十四丘の一小て此ふるハ平  
野郷の内ありければ同名小て由來別ふる者あり  
少彦名命の御事を此記ハ三所出たる共ハ少日子  
根命と有り日女道丘神ハ其伊和郷の下小蜚子落處

者即号日女道丘と有る此丘の神を云あり期會ハ其  
枚野里ある筥丘小て出會せ給へるあり於此丘ハ即  
其菅丘小あり備食物及筥器等具と有る食物ハ四神  
出生章第十一書小保食神の夫品物悉備貯之百机  
而饗食之と有る此を云ふる可し其筥器ハ和名抄竹器  
類小籠の次小箱楊氏漢語抄云箱音篋若反協筥居許篋  
音篋音匪以上皆有て此ハ竹器の類ふる小就て稽  
ふ小大嘗祭儀小生鰓生螺各六籠都志毛古毛各六  
籠又ハ乾羊蹄蹲鴟モ橘クニ子各十五籠ふど斯る類を籠物  
と云る此器を筥音と云て机代物小添て出す古の礼式



ありつゝありけり其<sup>苦</sup>丘の名を得たるを以ても此  
御饗應の大丸<sup>ごり</sup>し事知る備此日女道丘ハ  
大明命の御船を打破られたるより出來れる丘ある  
小己く其丘神の有が不審しき小就て考る小先蚕子  
を日女道と云事より説を成す可きあり<sup>ん</sup>此穀物と  
蠶<sup>ハ</sup>保食神の御身より成出たる者小し有ければ  
麥<sup>麥</sup>豆ふど小自然女陰の象形を備へたりければ此蚕  
子をも姫虫ふと云けむりと考る小然小非ず其二書  
み又口裏含蚕使得抽絲自此始有養蚕之道焉と有る  
道ハ女の手末の業を云ふり雄略天皇六年御紀小天

ハの御名の説考合  
す可

皇欲使后妃親桑以勸蚕事繼体天皇元年御紀詔小后  
妃親蚕而<sup>也</sup>澠桑序と有て此道ハ必女の手にて物爲べ  
き古今の常典ふるが故小蚕子を日女<sup>ヒメメ</sup>子と云ける者  
とこり思ゆれ<sup>下三百三十一</sup>備此小大汝少日子根命小食物等を備  
給ふ事全く彼保食神の素戔鳴尊を饗<sup>良</sup>奉<sup>り</sup>せ給へ  
りし狀小彷彿りければ此も蚕子の丘と成れる小就  
てハ其御靈の保食神の分魂や此小御在<sup>り</sup>坐て一時  
其二神小期會<sup>せ</sup>御在<sup>り</sup>坐て然る饗應の御事こり  
ハ御在<sup>り</sup>坐つ<sup>る</sup>の<sup>備</sup>又當郡白國神社と申すハ即素  
在<sup>り</sup>坐す由ハ己小傳<sup>ハ</sup>卷百<sup>十</sup>丁<sup>小</sup>注<sup>セ</sup>るガ  
如<sup>し</sup>又當郡周智郷有<sup>ハ</sup>此も其素戔鳴尊<sup>ハ</sup>御孫<sup>ハ</sup>

○日本書紀傳三十一

○百四十二



當りて給ひて即大歳神の石神に御在り坐せ給は此小  
又離れたる御由緒小ハ非るをも一應心得置べき者  
ふ又和名抄小揖保郡香山加古郷有り風土記小香山  
里本名鹿土下上所以号鹿來墓者伊和大神占國之時  
鹿來立於山岑是忽似墓故号鹿來墓後至道守臣爲  
宰之時乃改名爲香山家内谷即是香山之谷形如垣廻  
故号家内谷と有る此ハ大己貴神の<sup>巡坐</sup>御時小  
鹿の來りて山上小イミけるを墓小形容くせ給へり  
し小起りて名と成れるを後の香山と改れる由あり  
同記小其次小阿笠村伊和大神巡行之時告其心中熱  
而控絶衣袒故号阿笠と有ハ香山里中の一村の名と

見えたり但此事如何とも辨へ難し此ハ夏日ふどの  
炎熱小若くよせ給ひて御衣の袒をバ控絶させ給へ  
る御事ハ聞えたり然れども此小因て阿笠と号けた  
る此言何とも説べき事を知ず又一云昔天有二星落  
於地化爲石於此人衆集來談論故云阿笠と有ハ謂ゆ  
る流火の落て石と爲れる由あるが此小てハ阿ハ歎  
辞笠ハ層重の義と聞ゆれば上あるも御衣の層高き  
を厭ハせ御在り坐て阿ハ層重と詔給へる小や有じ  
猶考不可き事共あり其次小御橋山大汝命積立橋山  
石似橋故号御橋山と有ハ香山里の内あり楮俵を積



て梯立と成り給へる化して山と成れる由ふる可  
 然くハ積俵立橋の下ハ化爲山ふどの字無くして  
 ハ聞え難く此大神の御時ハ御物の豊饒ハ御在り坐  
 ける御事此一事を以ても見奉り知べきあり又此郡  
 小稻積山と云有り同記ハ小稻積山大汝少日子根命ニ  
 柱神在於神前郡聖里生野之岑望見此山云彼山者當  
 置稻種即遣稻種積於此山山形亦似稻積故号曰稻積  
 山と云事も見ゆ此積ハ石の如く稻を積置倉  
 ふる由ハ傳十四四十小己小注り石の稻積山の所  
在猶尋ぬ可く聖  
 里ハ和名抄小謂ゆる神崎郡埴岡郷の事あり生野之  
 岑ハ今も神崎郡と但馬國朝來郡との堺ハ生野銀山

△下百七十九小あり

△又香山里飯盛山  
 護伎國宇建郡飯  
 神之妻名曰飯盛  
 大刀自以神度來  
 占以山而居之故  
 名飯盛山也云事  
 も見也

又生野嶺とて有る此地の事あり此記ハ神前郡生野  
 所以号生野者昔此處在荒神半殺往來之人由此号死  
 野以後品太天皇勅云此爲惡名故爲生野と有て古名  
 死野ふるを如此詔直とせ給へる小妖氣息て荒神の  
 荒いふむ絶けり禁方ふる由傳十九卷六十六丁小注せ  
 け惡事を妨ぐ林方ふる由傳十九卷六十六丁小注せ  
 り又越部古之郷有り同記ハ越部里出雲國阿菩大神  
 聞大倭國畝火香山耳梨三山相闘以此欲諫止上來之  
 時到於此處乃聞闘止覆其所棄之船而坐之故号神阜  
 阜形如覆と有る阿菩大神の御事ハ神阜の所ハ云べ  
 く万葉一十一近江宮御宇天皇三山御歌ハ高山波雲  
 根火雄男志等耳梨與相諍競代神代從如此尔有良之  
 古昔母然尔有許曾虛蟬毛孀子相格良思吉反歌香高

○日本書紀傳三十

○百四十四



山與耳梨山與相之時立見尔來史伊奈美國波良と有  
ハ此の故事を取て詠せ給へる者あり右ハ三山相闘  
と云ハ御歌の如く香山天の男神と耳梨山の男神と二  
柱トて畝火山の女神と相挑よせ給へるを云あり其  
短歌ハ香山と耳梨山と相闘時と云ハ此ニ神の男女  
小闘給へるハ非下何れも男神小御在り坐て共  
ハ其中を執て和治給ひしとあり到於此處ハ其越  
部里小あり然るハ右の御歌ハ伊奈美國波良と云  
ハ即印南郡あり京ハ詠せ給へるハ傳聞の御誤り

とも思ひしうども猶此處ハ闘の止め事を聞食て  
其虚實を見定ハ印南野迄御在り坐て其より引返り  
て元の越部里小止まりて給へるありけり覆其所乘  
之船而坐之と有る船ハ謂ゆる磐船ハて山越え野行  
き御虚空翔り御在り坐なるあり其船を覆て坐て云  
ハ其御船小用無ガ故ハ此小て踏頃させ給へるが一  
堆の丘の成れる其中覆船の御霊を留めさせ御在り坐と  
あり阜形如覆ハ阜形如覆船と云義あり故号神阜  
ハ常小神山神岳神田神野ふと虚字ハ神某と上小置  
て云事も有れども上古の例打任せて大神と申すハ



大己貴神を申奉り唯小神とのに申すハ味耜高彥根  
神亦名事代主神の御事ハ限りなき御事なる故小其  
阿保善大神ハ必其神ふしむと思ゆ然るハ右も云る  
饒磨國阿賀古阿賀比賣二神ハ伊賀國の阿城津彦阿  
城津姬二神小御在し坐る其ハ事代主神御夫婦の御  
事ふる小和名枚其伊賀郡阿保郷阿我郷ヲ相並べるをも證  
と爲べきあり先小天穗日命ふしむと思ひしハ唯其  
天と穂との言ふの眼を著りしハ  
て外小思寄も何々然考たりし説ありけれ甚拙  
くて有り然る小古史第百四十五段微小故子神阜  
阜形似覆と有を文を改めて形子神集之形覆と引る  
ハ仙覺抄小有を引れずして万葉緯小然る誤寫の有  
を取られし者小して據小足小且神集之形覆と云  
事ハ如何ふる事小更小聞えざる心ち爲るハ如何

次小林田波也郷ハ風土記小林田里本名淡  
奈志土上中所  
以稱淡奈志者伊和大神占國之時御志植於此處遂生  
榆木故詳名淡奈志と有る御志ハ御著ク御杖の誤  
ふる可し又右の淡奈志ハ波夜志を誤れり本名  
ハ林ありけむを後小田小因て林田の稱ハ成れる  
ありけり其淡奈志ハ若くハ彼安奈无之之の如く訓べ  
くして始伊和大神の占シテ給ふ國ふる小依て无アテ無マ  
云けりを其榆木の生立ちしより林田の名ハ成れ  
る由ふも有べし次小所以名伊勢野者此野毎在人家不  
得静安於是衣縫猪手漢人刀良等祖將居此處立社山



本敬祭在山岑神伊和大神子伊勢都比古命伊勢都比  
比賣命其自此以後家<sub>ニ</sub>静安遂得成里即号伊勢野伊  
勢川因神爲名<sub>ニ</sub>有ハ伊勢風土記<sub>ニ</sub>謂ゆる伊勢津彦  
命の本生の地ふるふど<sub>ニ</sub>依て此<sub>ニ</sub>御靈を留めさせ  
御在<sub>ニ</sub>坐す御事<sub>ニ</sub>見えたり<sub>ニ</sub>借石の林田里ハ今猶林  
田<sub>ニ</sub>云て<sub>ニ</sub>神名式<sub>ニ</sub>謂ゆる祝田神社是あり<sub>ニ</sub>云の若  
其如くふるバ大己貴神を齋奉れるありけり又美囊  
郡高野里坐<sub>ニ</sub>於祝田神社神玉帶志比古大稻女玉帶志比  
賣豊稻女<sub>ニ</sub>云文有ハ此祝田神社を其高野里<sub>ニ</sub>祀れ  
るふる可<sub>ニ</sub>さ<sub>ニ</sub>祭神の説異あり其玉帶<sub>志比古玉帶</sub>比賣

二神ハ若<sub>ク</sub>イ<sub>ハ</sub>伊和大神<sub>御夫婦</sub>此ハ本の林<sub>地</sub>の  
神<sub>あり其<sub>ニ</sub>合て</sub>大稻女豊稻女二神<sub>ハ</sub>其田神<sub>御在<sub>ニ</sub>坐</sub>  
齋奉る故<sub>ニ</sub>祝田<sub>イハヒタ</sub>の称<sub>ハ</sub>成れるふる可<sub>ニ</sub>さ<sub>ニ</sub>其説  
下<sub>九十九</sub>云べ<sub>ク</sub>然るを社説<sub>ハ</sub>今<sub>ニ</sub>林田社<sub>ニ</sub>云て  
山中<sub>ニ</sub>在り<sub>ニ</sub>倭建命西國征伐の御歸る<sub>ニ</sub>當國吉美の  
沖<sub>ニ</sub>難風<sub>ニ</sub>遇給ひ<sub>ニ</sub>時御願ふ<sub>ニ</sub>御造建有<sub>ニ</sub>云  
傳ふ<sub>ニ</sub>當社<sub>ニ</sub>殿奥殿<sub>ニ</sub>有り<sub>ニ</sub>殿を<sub>キツネ</sub>吉<sub>ヤマ</sub>山祝田宮<sub>ニ</sub>  
申<sub>ニ</sub>て式ふる祝田神社是あり祭神三座中猿田彦大  
神左高靈神右水波女神あり奥殿を武旗八幡宮と申  
す祭神五座あり中素戔鳴尊左大己貴神右事代主神



又左應神天皇右日本武尊ありと云り今思ふ右の  
奥殿ハ本より林神社にて伊和大神御夫婦渡らせ  
給ふ可し彼玉帶玉帶比古比賣命神ハ下云小佐用郡雲濃里の神小坐と申すハ謂ゆる玉依姬命の  
御事子と聞ゆれば八幡宮と申す事其謂有り然りて口  
殿と申すハ即祝田神にして大稻女豊稻女二神を祀  
れるを其傳を亡ひて猿田彦大神とハ申すハこゝ有  
けの二殿共ハ其餘の神等ハ後ハ合せ祀れりあり可  
うとび事申すも更あり續風土記と云物小祝田神社  
高淤加美神美豆波賣神日本  
武尊熊襲及出雲梟帥と云賊を征伐し給ひし時播磨  
吉備の沖の風難を此神小祈給ひし故小此吉松山小  
静の舟守神或ハ梶取神と云り雨を祈りハ水徳の  
神ふればありと云れハ此二神ハ實ハ日本武尊の鎮

奉らせ給へり若くハ俗小云ふ龍卷ふとの事小遇せ給  
へり小揖保伊比郷の故事ハ同記小揖保里云云粒丘  
所以号粒丘天日槍命從韓國度來到於宇頭川底而乞  
宿處於葦原志舉乎命曰汝爲國主欲得其所宿之處志  
舉乎命即許海中尔時容神以劔攬海水而宿之主神即  
畏容神之盛行而先欲占國巡上到於粒丘而食之於此  
自口落粒故号粒丘其丘小石比能似粒又以杖刺地即  
從杖處寒泉涌出遂通南北北寒南温生白と有り偕此  
天日槍命ハ垂仁天皇三年小歸化の由御紀小載れ  
古事記ハ明宮の末小序れ昔有新羅國主之子名天



天之日矛と有る事あれども垂仁天皇御紀二年小謂ゆる  
都怒我阿羅斯の事の混れたるふころ有けぬ筑前風  
土記小高麗國意呂山自天降來日捍之苗裔五十迹手  
是也と云事所見たれば天より降御在坐し神あり  
けり偕神名式小揖保坐天照神社名神と有ハ謂ゆる  
天照御魂神の御事ふして寶鏡開始章第二一書小所  
見たる彼日矛を造く御在坐ける天糠戸神是ふ  
り亦名を天火明命とも申して即饒速日命ふて渡り  
せ給ふ所以已小傳廿一ニ四十七下廿二一丁小注上奉るが  
如し然る小此神の御天降の御事を天神本紀小饒速

日命稟天神御祖詔乘天磐船而天降坐於河内國河上  
哮峯云々と有る事あり其ハ古事記白檮原宮段  
小故尔迹藝速日命参赴白於天神御子聞天神御子天  
降坐故追参降來と有が如く其ハ後小天降御在坐  
ける時の御事ふて其以前小國形見ふどふ降と天  
給ひけぬ下三十五引丹後風土記を見れば大己貴命少彦名命の  
御時小己小天火明命と申す御名ふて御事跡有る上  
ハ其少彦名命の御在坐依御在坐其頃已前小天降とせ給  
へるありけり若て其高麗國小天降とせ給へるハ此  
風土記の狀小依て考ふ小容易く此小容申されり



ありけり若て火明命と申すハ日像之鏡小因れる  
御名日槍命と申すハ日矛を作れし功小因れる御  
名天照御魂神と申すハ其二物を仕奉りて天照太神  
の石戸隱の御時小御功御在し坐ける由の御名と聞  
ゆれば今姑く饒速日命の御事と思定めて説を立る  
者ふり但其論の如きは此小容易く盡す可き非れ  
ハ垂仁天皇御紀の傳小譲る可きあり但其三  
年の下小故天日槍娶但馬出島人大耳女麻多鳥生但  
馬諸助云と書く姓氏録ある三宅連等ハ其命の子  
孫ふる實徴有て動くは事多し其も以前の天  
日槍命の神靈の現れ御在し坐て其女小娶給へり  
見し小何てふ事ハ有じ又其持渡給ひし物の申す  
日鏡と云物有も新羅人の作ふてハ似着し物ハ彼  
日像之鏡日矛を天上小て作れし時の御物ふりて  
ハ叶ハざる心ちす何かしても天上の御物ふる事決

くふじ宇頭川ハ揖保川の古名ふる可し底ハ邊と訓  
有ける宿處於葦原志舉乎命ハ韓國より渡給へる神  
ふるが故小其住處を國神小乞給へるあり即許海中  
と有ハ葦原伊和大神の專國土を主領し御在し坐ける程  
ふて容易く讓聞えさせ給ふ可き御心御在し坐ざる  
を以て海中を許給へるふて其厭給ふ御有狀見え  
り以劍攬海水而宿之と有ハ島嶼を攬探り得て此を  
家と成給へるあり万葉四十六小稻日都麻浦箕乎過  
而鳥自物魚津左比去者家島云々十五十三小柔保等  
里能奈豆左比由氣婆伊敝之麻婆久毛爲尔美延奴又



二十回来筑紫海路入京到播磨國家島之作歌五首の  
九丁回來之麻波奈尔許曾安里家礼宇奈波良乎安我  
中伊敷之麻波奈尔許曾安里家礼宇奈波良乎安我  
古非伎都流伊毛母安良奈久尔と有ハ今宅島と云小  
島あり若天日槍命の宿給ひし島ハ此家島ありし小  
ハ神名式小揖保郡家島神社名神と有ハ其神を祀れ  
るふめり續後紀小美和七年六月乙巳朔甲子播磨國  
揖保郡家島神爲官社と有る是あり今宮浦明神と申  
せりり主神即畏容神之盛行而ハ伊和文神先ハ  
然る盛行坐了神思ハ思さりつるを此御所置を  
見行ハ御在し坐て始て畏き神ふる事を知食し

趣あり先欲古國巡ハ先欲巡治古國の義治て後小天日  
槍命と御軍の御在し坐けるを以見ハ其地を掠侵さ  
る事の無さや否と御心を用ひさせ御在し坐て國  
巡給へる由あり其丘石云ハ同記小揖保里神山  
此山在石神故号神山生推子ハ有る此邊の事あり可し右  
小寒泉涌出ハ揖保里の文小次て出水里美奈志川所  
以号美奈志川者伊和大神子石龍比古命與妹石龍比  
賣命二神相競川水妖神欲流北方越部村妹神欲流於南  
方泉村尔時妹神踰尔山岑而流下之妹神見之以爲非  
理即以指櫛塞其流水而從岑邊闢溝流於泉村カレ尔妹



△小や又下六百十五玉  
榊姫の所小此文を引  
て注るが如く石龍地  
古命申す事代主  
神の八尋熊野小化  
給へる由は通ずる  
ハ右小即以指榊姫  
其流水有ハ謂ふ  
玉榊比賣命の御名  
小似著ハハハハハハ  
流於泉村マハハハハ  
姫命申す御名小  
由有を以て石龍  
比賣命即其玉榊  
小何れハハハハハハ  
柱神等

神復到泉底之川流奪而將流於西方葉原村於是妹神  
遂不許之而作密樋流出於泉村之田頭由此川水絶而  
不流故号元水川と有ハ其泉小就なる故事ハ亦然  
ずとも揖保里小近キ地と所見なり此石龍比古命石  
龍比賣命二神ハ御祖詳ふ了了若くハ龍神（謂ゆる溝神）ふど小御  
在（け）坐（け）不（け）や（け）傳（け）廿九卷八十三丁又上百四丁ふも注る  
御在（け）坐（け）けるハ決めて靈龍神の御女ふて八上ハ彌靈龍  
ふる可くして即靈龍神小亞ハ義ある可く又其御子小  
御井神の生出させ給へるも其御祖神の縁ふて然る  
井水を掌とらせ給へる御事と見ゆれば此の妹妹二  
神も其ハ上比賣命の生給ふ御子小坐了故小然る溝  
川の事を自由小爲させ給へる者ある可く如此く互  
小相競（け）給へる云も大なる恩頼を天下小業給  
ふ大神と成らせ給ふ基本小てヤ御在（け）坐りけむ

榊姫今夫

又廣山郷ハ同記小廣山里（舊名）土中上所以名都者可者  
石比賣命立於泉里波多為社而射之到此處箭盡入地  
唯握出許故号都可村以後石川王為惣領之時改爲廣  
山里と有る石比賣命ハ右の石龍比賣命ふる由ハ此  
小謂ゆる泉里即泉村ふて右小謂ゆる出水里是ふる  
を以知る即伊和大神の御子小ハ坐せども此石ハ  
伊和ハ非ず此廣山郷の屬邑ふる可く次ハ枚方里  
の故事二處出たり一ハ意須比川品太天皇之世出  
雲御蔭大神坐（於）枚方里神尾山每遮行人半死半生尔時  
伯耆人小保豆因幡人布久漏出雲人都伎也三人相（愛）



申於朝廷於是額田部連久等令禱于時作屋形於尾  
形田作酒屋於佐山而祭之宴遊甚樂即櫛山栢掛帶  
栢腰下於此川相獻故号壓川と有る神ハ上古よりハ  
て祭ハ應神天皇の御世ふり御蔭大神と申す御蔭  
ハ傳十四百廿九六十三丁ニハ注ま如く御靈マ  
申す事ふる多くハ荒御魂を申す例あり毎遮行人  
半生半死ハ其神氣ハ厭うれ奉る事多ク有る思合す可し屋形ハ御社ふり酒屋ハ  
酒殿ふり櫛山ハ山名ふり栢ハ万葉十九二十丁小皇祖  
神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保寶我之  
波と有て謂ゆる葉盤ハチの事あり挂帶栢腰ハ下ハ壓川

と有る照見し彼葉を編成して意須比の如く背よ  
り腰ハ巡り掛る由ふり此を以て川名と成れる  
ふしハ神名式ハ揖保郡家比良神社ハ有る是ハ  
可くヤ神樂歌韓神未ハ也比良天乎天耳止利毛知  
天云く有る思合す可し又云く枚方里佐比岡所以  
号名佐比者出雲之大神在於神尾山此神出雲國人經過  
此處者十人之中留五人五人之中留三人故出雲國人  
等作佐比祭於此岡遂不和受所以然者比古神先來比  
賣神後來此男神不能鎮而行去之所以女神怨怒也然  
後河内國茨田郡枚方里漢人來至居此山邊而敬祭之



△百七十 小云伊和  
生大名持御魂神曼

△右の因幡伯耆出  
雲人の妻して奈  
れる此より後の事  
之所見たり信右  
の結文は佐用郡赤  
加郡岐原の文に難  
波高津宮天皇之世  
伯耆具漏

僅得和鎮因此神在名曰神尾山又作佐比祭處即号佐  
比岡と有も右の故事と同一地ふり此小謂ゆる出雲  
之大神ハ右小出たる出雲御蔭大神の御事小して即  
大己貴神の荒魂あり出雲國人の過る毎小宗給へる  
其国の大神小御在し坐小其故實を知て祭る者無  
きを怒らせ給へるふめり佐比ハ鋤持神の鋤小て小  
刀を云ある可し比古神ハ其御蔭大神を申し比賣神  
ハ其后神を申せるあり此小和い受させ給はざるハ  
男神ハ其祭を受させ給はずして行去らせ給へる故  
小女神の其恨を添ふ此小又怒らせ給ふとふり若て

△此揖保郡小係れ  
此神頭色之玉又  
有有流泳一是亦  
五色

其神神尾大神の御在し坐す神尾山小て其佐比を作りて祭  
れる庭ハ即佐比岡ふり皇國の神民の祭を享  
の祈事小甘ふい給へる敬祭の懇切ふると懇切ふ  
方里土中上所以名枚方者河内郡茨田郡枚方里漢人  
來到始居此村故曰枚方里と有て是郷名の起る所ふ  
るが上件神尾の如くハ品太天皇御世小徙住へるふり右  
ふて大己貴神の故事ハ大凡小盡せり又神島伊刀島  
等所以松神島者此島西辺有石神形似佛像故因為名  
云く神尾有も由有げある事ふり如此く佛像小似たり  
石神ハ諸國小多き物ふり今ハ佛佛其方小引付て  
不動薬師の類小誣ひ作者を傳教弘法の輩小爲る事  
ハ甚味氣無き事ふり己ハ文徳天皇寶録小見えたる  
大洗磯前神の御形をも彩色非常或形沙門云云云ふ  
非下又揖保郡室津中臣印達神社と云ふ船居有り其地小室神社と  
申す舊社有けり其社記小播磨風土記所載とて書



せるハ如何して右の古風土記ハ漏たりけり其  
文ハ云く當社の御神日向國高千穂峯ニ上嶽より浴  
北ニ葉山へ遷りて給ふ時此國小姑影向し給ふ此  
處名津ふり見行ハして便供奉の神等ハ令せて斧  
鉈録の三刃を以て葛藤を伐掃ひ湊を開き給ひし  
程無く名塚ハ成ぬ往來の船風波の難を凌ぐ  
有り當社の御神ハ異本舊事紀ハ針間國室戸神社  
淳穴宮天皇時味鋤記彦根大神出現鎮座と有る是  
り即山城國愛宕郡賀茂別雷神社の御神ハ御在り坐  
が故ハ古より今に至りて當社の祭祀ハ賀茂より神

人の参向ひて仕奉る例ハ日向國高千穂峯ニ上嶽  
の事ハ此神天神御子の御天降の御時ハ當りて天ハ  
達之衢ハ参迎申給ひて其高千穂峯より伊勢之狭長  
田五十鈴川上ハ赴らせ御在り坐けるふて此時の御  
名を猿田彦神と申奉る御事ふり二葉山ハ謂ゆる別  
雷山の名ふり此時ハ此室津を開らせ御在り坐て其  
地主神として此ハ鎮り御在り坐るふりけり但此ハ  
神ハ相並バ御在り坐て天下を經營せ給へり  
りハ後ハ此ハ並云べき事ハ非れども因ハ此風  
土記の逸文の可惜く出せるふり又御父大神の  
諸國ハ船津を開らせ御在り坐ける御事ハ己ハ傳ハ  
九卷五十七神名式ハ赤穂郡伊和都比賣神社上  
下ハ云りき



丁ふも注せる如く明石郡伊和都比賣神社御在り坐  
て共小伊和大神の嫡后宗像大神ふふし渡りて給へ  
りける其證ハ託賀郡黒田里の文下百九十云々云袁布山者昔宗  
形大神奥津島比賣命姪伊和大神之子到來此山云我  
可産之時託故曰袁布山と有る是より大己貴神を伊  
和大神と称奉りて其正對ハ伊和都比賣神と称奉る  
神ハ嫡后と御在り坐す此須勢理毘賣命を除て何神  
ハ御在り坐す又此小就てハ大己貴神ハ伊和都  
比古神と申す御名ふ自然小御在り坐す御事ふ  
りける大同類聚方小鞅可保藥播磨國赤穂郡苅磨家

高等之奏流方元者同國完粟郡内伊和坐大名持御魂  
神社神方也登奏須々有て伊和神社の神方の此小傳  
ハる云ふも其所以有べき御事ありし此御社加  
里屋領新濱小御在り坐て今三埜大明神と申す云  
り三埜ハ山甲岬の謂云右神の謂云又和名抄八野郷  
有り上四十九丁ふも事の序有て云るが如く出雲風土記  
小謂ゆる八野若日女命と申すも此と同神小て渡り  
せ給ひ又周勢郷と云も本より須勢理毘賣命の御名  
を負る地ふりけるふどを合せ見ハ大己貴神の御坐  
所ハ完粟郡小て后神の御坐所ハ此赤穂郡ふむ本宮



ふりけしし偕又續風土記ふ鞍懸石神部の沖ふ在り  
大己貴命の御鎮石と有ハ今鞍懸島と云る是ふる可  
く神名式ふ謂ゆる鞍居神社ハ此を祀れるく何れふ  
くても其大神の古昔床し地ふりけり此ふ就てハ  
保神社と申すも御在る坐ハ若くハ八千戈神ふてや  
御在る坐しじ續後紀ふ兼和七年六月己卯甲子播  
磨國赤穂郡八保神爲官社と所見たり但此二社の御  
事ハ試ふ云の  
右の八保神社を今別屋村ハ幡宮とも又ハ加里屋  
領安室谷岡村今梵天宮と云ふとも云り此方  
正し可く此を梵天と云ハ八十戈神の御事より  
混れつ可くし事ハ佛書ハ梵天を韋紐天とも云て  
手執輪戟有太威勢と云る是ふり鞍居神社ハ加里屋  
領岩木谷倉尾村の宮ふり云り然れハ鞍居ハ久良

袁理と和名抄ふ佐用佐用與郡佐用佐用與郷見風土記ふ云  
く讚容郡所以云讚容者大神妹妹二柱各競占國之時  
妹玉津日女命捕卧生鹿割其腹而種稻其血仍一夜之  
間生苗即令取殖尔大神勅云汝妹者五月夜殖哉即去  
他處号五月夜郡神名贅用都比賣命今有讚容町田也  
即鹿放山号鹿庭庭山四面有十之所見此大神と  
ハ例の伊和大神の御事あり各競占國とハ妹妹二柱共  
ふ互ふ國土經營の御功を立競ハせ給へるふて御争  
の謂ふハ非ふる妹玉津日女命と申すハ上件ふる  
伊和都比賣命の御事ふり彼玉依姬命と申奉る御名



の例ふり種稻其血とハ稻種を鹿血ハ蒔セ御在リ坐  
けるハて如此爲コ給ヘ速ク稻の生ル謂ハ有ル御  
下百九十一引託賀郡雲潤里の文少大水神神云吾以兒血血故不欲河氷氷有リ  
事ト見ル諸此ハ大神ハ先立テ其地ヲ我御田ト占コ  
せ御在リ坐ヒ事ハ右ハ谷競石國ト有ル知ベ  
大神ハ勅云ハ伊和大神の其後ハ御在リ坐テありハ五ハ  
月夜殖哉ハ妹者ハ佐夜殖多留哉ト訓ベ佐夜の佐ハ  
右ハ生苗ト有ル苗ハあり夜ハ速クあり大神の占給ハむ  
と爲コ給ヒ地ヲ一夜の間ハ苗ヲ速ク殖給ヒて  
我御地ヲ占給ヘる哉ト詔給ヒて大神ハ他處ハ物爲  
せ給ヘる故ハ五月夜郡ト云名ハ出來又此ハより其

小因テ其地名ヲ以テ贊用都比賣命ト稱奉ルとふり  
然ル小古事記ハ市寸島比賣命亦御名謂狹依毘賣命  
と有ル御名ハ符合ヘるハ其事ヲ思寄セて御名ハ  
負セ奉リけるハやハ神名式ハ佐用郡佐用都比賣神社  
續後紀ハ嘉祥二年十一月辛亥朔壬子播磨国佐用郡  
佐用津姫神預官社ト有ル是ハふり今長谷村ト云ハ御  
在リ坐ヒ次ハ吉川ハ本名玉ト大神之玉落於此川故云  
玉落略と有ハ伊和大神其ハ后神の御許ハ御在リ坐ヒ  
る御時ノ故事ト所見ルなり次ハ按見佐用都比賣命於  
此山得金按故曰山名金肆川名按見伊師即是按見之



河上川底如床故曰伊師其山生精と有ふと佐用郷  
 内不在る地名共ふり但右の佐用都比賣神の上小謂  
 て謂ゆる宗形大神奥津島比賣命是なり然るを狹依  
 毘賣命ハ地神本紀小見えたる中津島姫命是なり其  
 別神と成り事ハ本より然れども大己貴神の  
 后神と成りて御在り坐す小ハ三神の御身を合せて  
 一神と成給へる事傳十五卷二百十八下小注はる  
 如く然れハ其正身を云時ハ三神ハ大己貴神と相  
 と對給へる小ハ一神又速瀨郷ハ同記小速瀨里中依  
 と見奉る可きあり  
 川湍速速湍社坐神廣比賣命故那都比賣弟と有る廣  
 比賣命詳ふず那都比賣又今知り難し古事記小羽  
 山戸神娶大氣都比賣神生子云々次夏高津日神亦名  
 夏之賣神と有る是より次小凍野廣比賣命石此土之時

凍冰故曰凍野凍谷と云事も見ゆ又柏原郷有り同記  
 小柏原里荅戸大神從出雲國來時以島村岡為吳床坐  
 而荅置於此川故号荅戸也不入魚而入鹿此取作鱠食  
 不入口而落於地故去此處遷徙と有ハ伊和大神の始  
 て此國小御在り坐たる時の御事ふる可し荅ハ和名  
 抄漁釣具小荅野王按荅和名挿魚竹筍也筍取魚竹器  
 也と有る是より荅戸ハ字倍閑と訓べし其荅ハ仕奉  
 れる戸を云と聞ゆ此小魚を捕むと為させ給へる小  
 鹿を得させ給へるハ一の恆事なり御口小食給ハむ  
 と為させ給へる小地小落たる將一の恆事なり此地



ハ御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>べき地<sub>ニ</sub>ズ<sub>レ</sub>て他處<sub>ニ</sub>遷去<sub>テ</sub>御在<sub>レ</sub>  
坐<sub>レ</sub>けり<sub>ト</sub>して柏原ハ彼處<sub>ニ</sub>幸行<sub>レ</sub>て御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>成<sub>ズ</sub>  
ぬる名<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>めり又大田郷有<sub>リ</sub>同記<sub>ス</sub>邑寶里<sub>上中</sub>弥麻  
都比古命治<sub>ル</sub>井修糧即云吾<sub>レ</sub>占多國故曰大村治<sub>ル</sub>井處  
号御井村<sub>ト</sub>有<sub>ル</sub>是<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>可<sub>シ</sub>此ハ大神の御子御井神  
の御事<sub>ニ</sub>ふる<sub>ル</sub>彌麻都ハ水纏<sub>ル</sub>て井水を巡<sub>ル</sub>給<sub>フ</sub>  
へる由<sub>ト</sub>聞<sub>ユ</sub>次<sub>ニ</sub>釜柄川神日子命之釜柄令採<sub>ル</sub>此山  
故其山之川号曰釜柄川<sub>ト</sub>有<sub>ル</sub>神ハ例の賀茂<sub>ト</sub>同<sub>ト</sub>  
く日子ハ日子根の略<sub>ナリ</sub>又釜柄を令採<sub>ル</sub>給<sub>フ</sub>ふ<sub>レ</sub>  
小據<sub>テ</sub>考<sub>ル</sub>ふる<sub>ル</sub>小此ハ正<sub>レ</sub>味<sub>ニ</sub>高彦根神の御事<sub>ニ</sub>

所見<sub>ル</sub>たり鋤<sub>ル</sub>鍬ハ國作の宝器<sub>ニ</sub>ふる<sub>ル</sub>由<sub>ハ</sub>上<sub>ニ</sub>丹波國  
鍬山神社松尾神社の傳<sub>ハ</sub>注<sub>リ</sub>又宇野郷ハ同記<sub>ス</sub>  
雲濃里<sub>上上</sub>大神之子玉<sub>ハ</sub>足日子玉足比賣命生子大  
石命此子<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>父心故曰有怒<sub>ニ</sub>有<sub>ル</sub>此<sub>ニ</sub>神ハ上<sub>ニ</sub>百四  
丁<sub>ニ</sub>謂<sub>ユ</sub>祝<sub>ル</sub>田神社<sub>ニ</sub>御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>下<sub>ニ</sub>四座の中<sub>ニ</sub>の玉帶  
志比古玉帶志比賣<sub>ニ</sub>神の御事<sub>ハ</sub>別<sub>リ</sub>大石命外<sub>ニ</sub>見  
當<sub>ル</sub>了<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>父心<sub>ノ</sub>稱<sub>ハ</sub>字多<sub>ク</sub>閑<sub>ニ</sub>氏<sub>ト</sub>訓<sub>ハ</sub>即<sub>ニ</sub>譽<sub>ニ</sub>奉<sub>ル</sub>  
事<sub>ニ</sub>ふ<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>怒<sub>ハ</sub>麗瓊<sub>ハ</sub>父神の御心を美麗<sub>ニ</sub>瓊玉  
の如<sub>ク</sub>御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>意<sub>ハ</sub>稱<sub>申</sub>て給<sub>ヘ</sub>る由<sub>ハ</sub>あり又  
云<sub>ハ</sub>久都野弥<sub>ハ</sub>麻都比古命告<sub>云</sub>此山踰<sub>者</sub>可<sub>崩</sub>故曰久



都野後改而云宇努其邊為山中央為野と有る此山踰  
者可崩と宣給へるハ勇みしき御言ふり此神若石小  
云が如く御井神小坐さば上百下十小注る出水里の  
文小石龍比古命石龍比賣命の川水を相競ハせ給ひ  
て妖神踰尔山岑而流下之と有る似着ハさ心ちす  
備此小故曰宇努ハ雲野郷の來由の二有ハ非ず始  
ハ都野ふりしうども雲野郷小接ける地ふるを以て  
終小其名ハ成れるふる可し但此弥麻都比古命の  
御事ハ如此云ても猶  
落著ざる心ち為る故小此を求るハ懿徳天皇二年御  
紀小后生觀松彦杵殖稻天皇伊弉有れども此天皇の御  
在し坐べき由無く古事記水垣垣宮段小御真津比賣命  
と申す女御子の御名見え又水垣宮段小大毘古命之

女御真津比賣命有る其も由無く国造本紀小意岐  
國造輕島豐明朝御世代觀松彦伊呂止命五世孫十埃  
彦命定賜国造有ハ應神天皇御世より五世以前の  
人ふれハ其御真津比賣命の同胞ふどハやと思ゆれ  
ハ其うとも思ゆれども右の二條の故事小見えたる  
口氣を考るか決く人ふハ非ずして神ところハ思め  
けれり和名抄小完粟志佐郡出たり風土記小云く完木  
郡所以名完木者伊和大神國堅了以後塚此川谷尾巡  
行之時大鹿出已古遇矢田村尔勅云矢彼古在者故号  
完粟鹿村名号矢田村有り是郡名の起原あり國堅  
了後ハ大己貴大神此國を作堅め竟させ御在り坐  
ける後ハあり塚此川谷尾ハ其塚を定めて内を巡  
狩りて給へるあり完粟鹿ハ志ハ阿波加と讀あり可



くして完粟ハ鹿下ふるを略きて郡名と成れるなり又但馬  
國朝來郡粟鹿安波郷ハ上ふる字を略きて地名と成  
れるふて其始此小出なる可事傳上九十注るを  
見て知べきなり次小宇波良村葦原志許乎命占國之  
時勅此地小狹如室戸故云表戸と有ハ國形を見行ハ  
御在り坐て室戸の如く打隠りたる由小詔給へり  
ふり此を宇波良と云ハ室ハ家の内ふて最其奥方小  
在る者ふるが故小上ウハラ在り云義ふる可次小比良美  
村大神之摺落於此村故曰摺村今人云比良美村と有  
る大神ハ例の伊和大神ふり摺ハ衣服令皇太子礼服

深紫紗摺の義解小謂摺者所以加袴上故俗云袴摺也  
と有て名義抄ふハ宇波美又比良美又母と訓り上裳  
又平裳又裳の義ふり故此文を上古ウラコハ唯ハ母との  
云つるを後小比良美と云とある可く諸神名式小  
但馬國朝來郡粟鹿神社名神と有て古本書入ハ一番  
室尾ハ幡大菩薩ニ番衣摺大明神云々此三神者粟鹿  
神御子と有ふ合せて右の室戸と室尾と相近く衣摺  
ハ本ハ衣摺キヌモふりけびが右の摺落モトシの事と合ふ小其室  
尾ハ幡と申すハ養父郡桐原神社を申し衣摺摺ハ朝來  
郡乃我石部神社を申して共ハ大己貴神小渡りせ給



へるを以て其故事ハ本より播磨国小起れりバ但馬  
國ハ此より徙りて御在り坐けむ御事を曉る可  
然れば傳廿九百六十云る但馬國の上古ハ大湖  
ありしを切開りて御在り坐て國を造りて給へるも  
先播磨の完粟より但馬の粟鹿ハ徙りて御在り坐  
けむと所思ゆる事共ふり石の如くハ大己貴大神の  
天下造御在り坐けむ程ハ出雲を本宮と伊和を  
行宮と爲させ御在り坐て國巡り作りて御在り坐け  
る狀ふるむ所思められける猶次ふる阿和賀山の所  
ふるも云べし然れば右の  
粟鹿神社の祭神ハ種々の説も有る事ふれども必其  
小大己貴神も御在り坐つ可き御事を曉る可し但右

の矢田村ハ和名抄ハ載りて何れハ郷名と成り  
たり然れども次ハ云る村ハ何れの郷ふるも屬する  
ハ完粟と云地方の一郷を成りて有る見ゆ又右の續きハ川音村天日槍命  
宿於此村勅川音甚高故曰川音村と有る此川音甚高  
と有る川ハ次ふる伊奈加川の事ふる可し次ハ庭音  
村本名  
庭酒大神御糧枯而生糶即令釀酒次獻庭酒而宴之  
故曰庭酒村今人云庭音村と有る大神ハ伊和大神ふ  
り御糧枯而の枯ハ乾字の義あり生糶ハ生麩の意ハ  
和名抄類聚小類釋名云糶和名朽也餅之使生衣朽敗也と有是あり  
て彼糶と成れるを云ふ庭酒ハ傳十九四下ハ注るが  
如く新嘗を尔波能阿比と云是ハ新嘗之と云ハ即新  
嘗の宴會を設せて給へる由あり次ハ奪谷葦原志許

△即神名式小庭田  
神社見えたるハ  
庭音の音通ふり  
りれハ其神の御社  
ありしなり  
△献庭酒ハ神ハ新  
嘗の御酒を獻  
て給ふ由あり事下  
百七十ハ注が如し

ト註目ハ洲ハ向ハ柳ハ二



乎命與天日捨命二神相奪此谷以其相奪之由形似曲  
葛之有る此二神の始末ハ次ハ云ベシ相奪之ハ互ハ  
其地を占むと争給へるふり形似曲葛ハ謂ゆる葛折  
ふり互折とも九折とも羊腸とも書く意ふり次ハ稻  
舂岑大神令舂於此岑故曰稻舂前生味其粳飛到之處  
即号粳前ハルヒキ之有る稻舂ハ和名抄木器類ハ曰抄附四聲字  
苑云曰和名舂穀器也杵岐舂槌也と見え粳ハ米類ハ  
杭米本草云粳米一名粳米和名宇と有る是ふり次ハ  
飯戸阜石國之時炊於此處故曰飯戸阜形亦似槽箕  
竈等と有る飯戸阜の下ハ大神の二字を補ひて聞

其飯戸ハ飯竈イヒバの義ホテ彼竈神を大戸比賣神と申  
す戸是ふる事傳廿六百三十ハ注せるガ如ク於此  
處ハ彼謂ゆる炊屋を此阜ハ作らせ給へるあり又  
似槽箕竈等ハ自然ハ阜の形ホも然る物の状を具  
へたりとふり槽ハ和名抄木器類ハ酒槽文選酒徳頌  
注云槽酒槽伍賀布祢如今之酒槽也と見え箕ハ上百三十ハ  
引る伊和里の文ハ箕落處仍号箕形立と有り其竹器  
類ハ箕説文云箕和名除美箕簸米之器也と有る是ふり  
竈ハ飯戸の戸ホて物を炊く竈の事ふり石の形似曲  
葛の例ハ依る時ハ此も然る器共の自然化然なるハ



△下百九十八云賀茂郡も下鴨里有碓居谷箕谷酒屋谷此大汝命造碓居谷之處者号碓居谷其置之處者号箕谷造酒之處者号酒屋谷之見え又飯盛當右号然者大汝命之御飯盛於此當之見え又飯盛當同者大汝命令春稻於下鴨村飛散此故曰飯盛之相重れるあり

有けめ儲石の曲葛の字ハ歌ふも多く都豆良袁利と詠り互折ハ文選注ハ道路交互曲折也と注  
 九折ハ道險而曲折有九也云ひ羊腸ハ呂氏春秋ハ大行山盤紆如羊腸之有て石の曲葛の言ハ能く相叶へる字共又三方郷有り同記ハ御方里上下所以号御形者葦原志許乎命與天日槍命到故黑土志嵩各以黑葛三條著足投之尔時葦原志許乎命之黑葛一條落但馬氣多郡一條落飯父郡一條落此村故曰三條天日槍命之黑葛皆落於但馬國故石但馬伊都志地而在之一云大神爲形見植御杖於此村故曰御形之有ハ二神相共小国を石給ふ事をト相させ給へるあり到故黑土志嵩ハ故字ハ到字の上ハ在べきなり又ハ彼の如く訓ふ

も有べし土志の二字ハ必葛の一字を誤れるハて黒葛嵩ふる可き事下ハ照して著ければ其心都豆良能多氣訓べさふり黒葛ハ出雲風土記ハ霜黒葛闇ニ耶ニ尔ハ有ふど都豆良マ訓より外無き事あり著足投之ハ遠く及ぶし給へし御爲ハ就上させ給へるふめり一條落祖馬氣多郡之有ハ上百一ハ注せるが如く神名式ハ同郡氣多神社御在し坐す其權輿ハ有べしひら一條落夜夫郡之有ハ傳世九百六十上九十九ハ注る養父郡夜夫坐神社五座名神大ニ座小三座之有る是あり一條落此村之云ハ即此御方里を云ふり故曰三條



之ハ其始ハ美須達ト云ケル次ハ天日槍命之  
 黒葛皆落於但馬國故占但馬伊都地<sub>志</sub>而在之有ハ  
 此時より彼地小住給へるあり神名式小出石郡出石  
 坐神社八座<sub>並名</sub>と有ハ彼八種宝物を納給へる物ヲ  
 一覽記小此祭神を大物主命天日槍命と云るハ實  
 據有を天日槍命ハ御出石神社<sub>大神</sub>小御在坐事下<sub>三百</sub>小注<sub>三</sub>ケル  
 小此故事小符合ひ<sub>三</sub>る者ふりけり一云大神爲形見  
 植御杖於此村故曰御形と有る大神ハ右の葦原志許  
 辛命小坐<sub>三</sub>ケ<sub>三</sub>植御形見とて御杖を此小植させ給へ  
 るハ右の一條落此村と云地小標置<sub>ニ</sub>せ給へるを云ふ  
 り故曰御形ハ右の三條小ハ抱<sub>ニ</sub>れず此御形見小就

今又丹波国何鹿郡  
 三方御布<sub>三</sub>葉田郡  
 三縣神社<sub>三</sub>見<sub>三</sub>田  
 縣

て御形と云るより其凡て小云ふ三條の名も隠るひ  
 たりし者ふりけり神名式小完粟郡御形神社所見  
 なる是あり又和名抄郷名小但馬国養父郡三方<sub>三</sub>加  
 氣多郡三方<sub>三</sub>加<sub>三</sub>と有も此三方郷と共小右の三條の  
 所以小起る事實小奇異ト迄小合る者あり又上<sub>三</sub>下<sub>三</sub>  
 小注<sub>三</sub>るガ如ク若狹國三方郡御方神社御在坐<sub>三</sub>此  
 同神<sub>三</sub>ふる可<sub>三</sub>事申<sub>三</sub>すも更<sub>三</sub>ふるを遠敷郡弥和神社を  
 伊和<sub>三</sub>と訓<sub>三</sub>る小故<sub>三</sub>有<sub>三</sub>べきあり又三方郡<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>見<sub>三</sub>神社ハ  
 出雲<sub>三</sub>風<sub>三</sub>土<sub>三</sub>記<sub>三</sub>島<sub>三</sub>根<sub>三</sub>郡<sub>三</sub>未<sub>三</sub>官<sub>三</sub>知<sub>三</sub>社<sub>三</sub>小<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>見<sub>三</sub>社<sub>三</sub>有<sub>三</sub>て<sub>三</sub>國<sub>三</sub>引<sub>三</sub>文<sub>三</sub>小  
 謂<sub>三</sub>ゆる<sub>三</sub>聞<sub>三</sub>見<sub>三</sub>國<sub>三</sub>是<sub>三</sub>ふる<sub>三</sub>ガ<sub>三</sub>此<sub>三</sub>完<sub>三</sub>粟<sub>三</sub>郡<sub>三</sub>小<sub>三</sub>按<sub>三</sub>見<sub>三</sub>佐<sub>三</sub>用<sub>三</sub>都<sub>三</sub>此<sub>三</sub>賣  
 命<sub>三</sub>於<sub>三</sub>此<sub>三</sub>山<sub>三</sub>得<sub>三</sub>金<sub>三</sub>按<sub>三</sub>故<sub>三</sub>曰<sub>三</sub>山<sub>三</sub>名<sub>三</sub>金<sub>三</sub>肆<sub>三</sub>川<sub>三</sub>名<sub>三</sub>按<sub>三</sub>見<sub>三</sub>と<sub>三</sub>有<sub>三</sub>る<sub>三</sub>此<sub>三</sub>小  
 出<sub>三</sub>たり<sub>三</sub>名<sub>三</sub>ふ<sub>三</sub>り<sub>三</sub>け<sub>三</sub>む<sub>三</sub>と<sub>三</sub>も<sub>三</sub>次<sub>三</sub>小<sub>三</sub>高<sub>三</sub>家<sub>三</sub>郷<sub>三</sub>有<sub>三</sub>り<sub>三</sub>風<sub>三</sub>土<sub>三</sub>記<sub>三</sub>小<sub>三</sub>高  
 思<sub>三</sub>ふ<sub>三</sub>る<sub>三</sub>名<sub>三</sub>ふ<sub>三</sub>り<sub>三</sub>け<sub>三</sub>む<sub>三</sub>と<sub>三</sub>も<sub>三</sub>次<sub>三</sub>小<sub>三</sub>高<sub>三</sub>家<sub>三</sub>郷<sub>三</sub>有<sub>三</sub>り<sub>三</sub>風<sub>三</sub>土<sub>三</sub>記<sub>三</sub>小<sub>三</sub>高  
 家里<sub>三</sub>上<sub>三</sub>下<sub>三</sub>所以<sub>三</sub>名<sub>三</sub>高<sub>三</sub>家<sub>三</sub>者<sub>三</sub>天<sub>三</sub>日<sub>三</sub>槍<sub>三</sub>命<sub>三</sub>告<sub>三</sub>云<sub>三</sub>此<sub>三</sub>村<sub>三</sub>高<sub>三</sub>勝<sub>三</sub>於<sub>三</sub>他



村故曰高家と有て聞えたる仕あり次小此<sup>比</sup>地郷ハ比  
治里<sup>上中</sup>云くと有て次小川音村天日槍命宿於此村  
勅川音甚高故曰川音村と有ハ其属邑と所見たり次  
小安志郷有り同記小云く安師里<sup>本名酒</sup>大神食於此  
處故曰須加云く今改爲安師者因安師川爲名其川者  
因安師比賣神爲名伊和大神將娶誂之尔時此神固辞  
不聽於是大神大瞋以石塞川源流下三<sup>此</sup>方故<sup>此川</sup>水  
此村之山生<sup>粉</sup>粉黑葛住<sup>等</sup>狼巖と有る食於此處と云ふ  
食字ハ<sup>知</sup>食字の義小て始先此地を<sup>ト</sup>とせ給へる謂ふ  
る可く故曰須加と有る須加ハ謂ゆる須賀宮の号を

此小移させ給へる者と所見たり偕此安師<sup>右</sup>百<sup>六</sup>四  
丁小引る<sup>大</sup>饒磨郡安師里<sup>上中</sup>右称安師者倭穴無神神  
戸託仕奉故号穴師と有る安師と此ハ同字ふりけれ  
ハ必阿奈志と訓べさふり因安師川爲名其川者因安  
師比賣神爲名と有る如くおしひおハ水小因れる神  
ふり神名式小完栗郡雨祈神社見えたる事思合す可  
く以石塞川源と有る見小若くハ靈籠神ふどの類小ハ  
御在り坐ごる其ハ傳世九<sup>八十</sup>丁小注るが如く大倭  
神社注進狀<sup>別社條小</sup>小神名式小謂ゆる丹生川上神社<sup>在</sup>同國  
此神者雨師神也祈雨止霖奉幣不週當社神名帳大和



國吉野郡丹生川上神社名神大 延喜式曰凡奉幣丹生  
川上神者大和社神主隨使向社奉之是丹生川上神社  
爲當社之別宮也有て同郡大名持御魂神社名神大  
嘗新有を此小合せ考る小凡て別社ハ后神御子神  
等を本社より祀る例ふるを以て若くハ古事記小謂  
ゆるハ上比賣命小御在る坐小ころと思ひて己小其  
説を成たりける小今此安院師比賣神と雨師神と言  
相近くりければ上百十小注るハ上比賣命の御祖と  
御在る坐す雷龍神小ころハ御在る坐つめ斯る所  
以ふどの御在る坐が爲小丹生川上神社を大和社の

△若此く注して後小  
其説を得たり下  
五百四十九丁小注り  
合せ讀て明くむ可

別社との齋奉する者之所見たり但此趣小て終小  
ハ申すも更ふりと雖も此ハ一時の御怒小て在る御  
事小て何時迄ハ御中絶させ給ハ然別社小御在  
る坐を以ても其餘の事共ハ曉る可一雨祈神社ハ雨  
師を誤れるうと思へども彼神ハ祈雨止雨の御祈の  
神小て御在る又風土記其安師里の内小阿和賀山伊和  
大神之妹阿和加比賣命在於此山故曰阿和賀山と有  
る此妹ハ例の后神の謂ふり阿和賀ハ阿和ハ伊和の  
轉小て賀ハ處字の義ふり然れば右百五十小注る伊  
和都比賣神小御在る坐す御事申すも更ふり次小伊  
加麻川大神石國之時鳥賊在於此川故曰鳥賊間川と  
有ハ伊和大神の國巡り作給へり始ふどハ未國推



くして水母如す漂蕩へりくバ海潮の未乾ざりけ  
る所も有けむくく其餘波ふて掃ふハ海魚の類の  
然る山川小遺れるも有くふりけり彼深山幽谷の内  
小貝ふどの石と化て存れるを以ても海潮ハ漸次小  
低く成り國土ハ年月小高く成ぬる事を徴す可證  
是ふり下三言加ふ列了尾張風土記海邊鳥山の古説考合す可大神之妻許乃波奈佐久夜比  
賣命其形美麗故曰宇留加と有る此ハ甚可畏事  
ふく説有り天孫降臨章小故皇孫就而留佳時彼國  
有美人名曰鹿葦津姬赤名神吾田津姬亦云皇孫因  
名木花之開耶姬而幸之と有る此女神の御名と等し云其始伊和太

神の御妻小御在り坐けるを後小幸れ奉給ひける小  
や其ハ古事記小唯留其弟木花之佐久夜毘賣以一宿  
爲婚略中故後木花之佐久夜毘賣參出白妾妊身今臨産  
時是天神之御子私不可産故請尔詔佐久夜毘賣一宿  
哉妊是非吾子必國神之子亦答白吾妊之子若國神之  
子者産不幸若天神之御子者幸即作無戸八尋殿入其  
殿内以土塗塞而方産時以火著其殿而産也略下と有る  
其一宿小妊給へるを疑御在り坐けるハ然る御事小  
が其御言小非吾子必國神之子と詔給へるハ殊小  
耳立て聞ゆるハ先小國神の御妻ふて御在り坐り神



ふるうゝ此御疑ハ御在ゝ坐けるふどふこゝろハ有け  
め神名式ふる但馬國養父郡夜夫坐神社氣多郡氣多  
神社ハ上九十八丁百小注るガ如く大己貴神小渡  
せ給へる小養父郡浅間神社氣多郡山神社名神と有  
を頭注小山神大山祇命と有朝來郡粟鹿神社名神  
ハ其木花開耶姫命の生奉らせ給へる天神御子彦火  
ニ出見尊小御在ゝ坐ゝ又上五十丁小注る駿河國富士  
山ハ大己貴神の作らせ給へるある小木花開耶姫命  
の主領せ給ふ神山又ふり其安倍郡神部神社ハ大己貴  
神小て惣社と申せるを此小浅間新宮立せ御在ゝ坐

△然可き御幽契  
の御在坐て大神  
の國邊の

も由有げふる御事ふる又上百五丁云る因幡國式  
外須賀神社を社傳小大己貴命木花開耶姫命と有り  
猶斯る類世小多在る可きを右等の事共小合せ考ふ  
る小其始ハ大己貴神の御妻小て御在ゝ坐けるを此  
御時小頭國小留めさせ御在ゝ坐けるを天神御子小  
幸此奉給へる者ふりけり偕如此再嫁事ハ人の上  
かても甚輕しく浅く事小爲るハ古今の常ふ  
りふがく凡て神の御上ハ尋常の心を以てハ難推さ  
御事の有ければ此も國邊の御時小天神御子の御  
爲小此女神の配御在ゝ坐ずてハ得有ふぬ甚く妙



△彼御天降の御時  
小御迎申させ給ふ  
猿田彦神事代主  
神の御尾前小仕  
奉小頭出させ給へ  
るふじふも心を深  
めて考直了可き者  
ふふむ

合又下二百平字小注  
了如く伊賀國阿拜  
郡宛石神社ハ例  
のハ女神ふて渡  
せ給へるを風土記  
ハ所祭木花開耶  
姫也マ有も然る由  
ふりけるふや

ふる御致有を以ふめり然れば如此説の寄來る小隨  
てハ云ふが其可畏く口塞がる心ちふむ爲るを  
若此説の誤るふむ思止べき善説をバ得しめ給  
ハむ神の御靈を頻ふ仰ぎ奉る者ふりう又思  
寄れりく此女神の亦名を神吾田津姫命と申す吾  
田ハ和名抄薩摩國小阿多郡阿多郷有り其地名より  
神名と成れる神名より地名と成れる其本末ハ  
未考ぞれども地神本紀小阿多郡阿多郷命と有る孫天  
日方奇日方命を亦名阿田都久志居命と有る吾田筑  
紫根命と聞ゆる小此命娶日向賀年度美良姫と有る  
由有り又ハ世孫阿田賀多須命も吾田堅洲命ふる可  
きふど此ハ所以又右の雲箇里の次小波加村古國  
有る事と所見たり又右の雲箇里の次小波加村古國  
之時天日槍命先到處伊和大神後到於是大神大恠之  
云飛度先到之子故曰波加村到此處者不洗手足必雨  
其山生柁拾檀黒<sub>葛山薑等住狼熊</sub>有ハ二神互小國を右る事を相競

ハせ給へるふて此ハ御軍ふどの御事竟させ給へる  
後小相共小國作の御事を功く成させ給へるふり  
天日槍命先到處ハ先ふ己く古給ひしを大己貴神の  
後小到坐て恠給へるふり波加村ハ波賀比村の略  
小て飛度先到之乎の御言小因れる者ふり丹波國多  
紀郡神田郷の邊<sub>中</sub>小波賀野村と云地有も此小由有る  
考ふ可く又和名抄小伊和郷有り風土記小云く伊和  
村<sub>本名</sub>大神釀酒此村故云神酒村又云於伊和村大神  
國作訖以後云於和等於我美岐と有る本名神酒と云  
事ハ土佐風土記小神河訓三輪川源出北山之中屈于



伊與國水清故爲大神釀酒也用此河水故爲河名也  
見えたり其土佐郡の階多郡賀茂神社の故事ふる小和名抄小  
當郡宇和郷有り又其水の届る伊豫國ふる宇和郡宇  
和郷有る美和より宇和も轉れるふり三代實録ふ仁  
和元年二月十日 授伊豫國正六位上宇和津彦神  
從五位下と有る其美和神小御在り坐す御事を知て  
立返りて又此文を見る小伊和ハ實小美和の轉れる  
ありけり其由ハ右七十五丁百六十四丁百小注るが如く若狹國  
三方郡御方神社闇見神社坐ハ此宗粟郡の三方按見  
より起れる神名ふるが其遠敷郡弥和神社を例の美三

和ハ訓ずて伊和と讀來れるも此伊和大神小坐が  
故ふる可く又因幡國高草郡伊和神社御在り坐小其  
隣れる邑美郷郡小美和郷有り此を以見る時ハ神酒  
を伊和と云事甚其謂有る者ありけり大神國作訖以  
後云於和ハ大神を古くより意富和と云ふ其略ふり等於  
我美岐ハ我神酒と云ふ等しとふて此我ハ大神の御  
方小附て申せるふり然れハ意和云ハ我神酒の義  
ふるふて其より伊和と轉り云とふて此ハ大和國の  
三輪と唱を分て神ふる称奉り地名ふる負せたる者  
と所見たり故此伊和ハ大神の出雲より御在り坐て



此邊の諸國を造りて御在り坐す爲小宮柱太高敷せ  
 給ふ御里ふるが故小御自伊和大神と称奉り此小就  
 て后神を伊和都比賣神と称奉る御事小有ければ  
 甚徳バ一を神都ふる者二り美和の事ハ下三四百五  
 小云べ一又伊和大神小猶伊和都比賣神の御名御在  
 古命の御名御在り坐す阿和比賣命の對小阿和同言ふ  
 れバあり又其伊豫國の宇和津彦神の並小宇和津姫  
 神の御名御在り坐す一傳二十八卷九十八丁小注  
 るガ如く宇和郡小三間郷有ハ筑後國一水沼君の  
 三女神を供奉りて住居の地ありければ一氏二小漏さ  
 せて給へれども此小然る神社の必御在り坐す一小合  
 者二ふり三り四神名式小完栗郡一大名持御魂神社二大名神  
 御在り坐す是即伊和大神の本宮小ふむ渡りて給へ

りける一宮記小大己貴命御魂と出たり祭神の説ハ  
 續風土記小伊和明神中九所神秘東五十猛命西大己  
 貴命と有り其中を別一して左右ハ右二百三十九三小注せ  
 る饒磨郡射楯兵主神社二座と一事ふり其伊和大神  
 と申奉るハ大己貴神小渡りて給へれども其大神を  
 主神と祀奉るふむ一小ハ大名持御魂神とハ称奉る  
 小二者ふり三允て某魂神と申奉るハ其主なる神の  
 御在り坐る其御功用を輔佐奉給ふ御神小申奉る例  
 ありければ其和魂神荒魂神小御在り坐べりむ一小  
 此伊和の地名の本ハ神酒一ふり二を以見れば其和魂



神<sup>本マ</sup>うと思ふ小其ハ別小大倭物代主神社御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>  
且其を某魂神と申奉る御事物小所見ざりけれバ難  
定<sup>本マ</sup>うを大國主神小對へて大國御魂神と申奉る即荒  
魂神小御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>了例を立て考る小大名持神小對へ  
て大名持御魂神と申奉りて正しく荒魂神を此小  
主と齋奉る小彼大和社小ても中<sup>本マ</sup>小大國魂神御  
在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>て左<sup>本マ</sup>小八子戈神右<sup>本マ</sup>小御歳神の御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>て八  
子戈神ハ大己貴神の亦名小御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>てども其荒  
魂神の從<sup>本マ</sup>祀<sup>本マ</sup>と齋れさせ御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>等<sup>本マ</sup>りけりけれバ  
此小九所神秘と云る中座の御神ハ大國御魂神小御

御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>て即大名持御魂神是<sup>本マ</sup>なり然れバ神代より  
以降大國魂神の本宮と爲てせ小甚止事無く御在<sup>本マ</sup>  
坐<sup>本マ</sup>ハ唯此伊和社のいづ有ける但伊和大神ハ大己貴  
神小御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>了事次く注す如くして此地名をさへ  
小御名小稱奉る御事ふる小此小其荒魂神を主と爲  
て齋奉るハ彼天日槍命と戰給へるふど專其神の御  
カ小依給ふふどの御事小依ふる可し然<sup>本マ</sup>るハ大和國  
城上郡大神大物主神社名神大月次  
相嘗新嘗ハ其和魂神を祀  
れる者<sup>本マ</sup>り<sup>本マ</sup>神代より大己貴神御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>て其從祀小  
立せ御在<sup>本マ</sup>坐<sup>本マ</sup>が如き例共有て事の趣小依てハ或ハ



大物主神を主として或ハ大國魂神を表ふ立て御正体  
の御事ハ却りて其御殿ハ御在り坐ふと所以有る御  
事と所見たり此御社の御事ハ傳廿九六下委く  
注し奉りりさう又上百三十注せる饒磨郡伊和  
郷ハ御在り坐了謂ゆる惣社ハ當宮の別社ハて渡り  
せ給ひて欽明天皇御世ハ伊和君等より徙住る時ハ供  
奉る神社ハ坐り此伊和社説ハ欽明帝師安元年甲申  
五年ハ當れり宰相記ハ欽明帝治廿五年記伊和恒郷  
云可祭朕於此地蓋上代之幽契或翌日忽平林中双鶴  
刷羽佇立了時恒郷奏上帝營室殿被寄神戶併定當國  
一宮而被授正一位有右ハ詔ゆる惣社ハ併定當國  
同年六月十一日ふり其二月ハ祀れる社を僅ハ四月  
を經て信ハ徙奉る云事心行ず故思ふハ其二月ハ

ハ鶴の瑞有り且其祭祀を乞ハヤ給ふ神託ハどの御  
在り坐けむを朝廷ハ奏して後ハ謂ゆる官社の狀ハ  
成り奉りるハ今云限ハ非ず正一位ハ神階ハ傳廿九卷ハ  
事ハ下ハ三代實録を引たるガ如ク負觀元年ハ動ハ  
十五丁ハ位下元慶五年ハ正四位下ふり此後天下諸神  
等從四位下元慶五年ハ正四位下ふり此後天下諸神  
増一階の事度有り大倭神社注進狀ハ新國史云  
寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉授五畿七道諸神三  
百四十社各一位ハ階ハ有ハ名神大社の御事ハ見ハ然  
る時ハ此ハ正四位上ふり其後ハ園大曆ハ依て推ハ  
元慶三年永保元年永治元年治承元年元曆二年建治  
元年ハ正一位ハ進よせ給へるふりけれハ其ハ當  
り若て其伊和大神ハ正しく大己貴神ハ渡りて給へ  
る御事を証し奉る可し託賀郡黒田里の文ハ云袁布  
山者宗形大神奥津島比賣命姪伊和大神之子到來此  
山云我可産之時訖故曰袁布山ハ古事記ハ故此大國



主神娶坐胸形奥津宮神多紀理毘賣命生子阿遲鉏高  
日子根神次妹高比賣命下と有ふ合る即是其第一証ふ  
り是其后神を伊和都比賣神と称奉る據ふり又譚用  
郡の文所譚容者大神妹妹二柱各競占國之時妹玉津日女  
命云くと有る妹妹二柱嫡妻と相對ふ時ふ云格ふれハ  
右の宗像大神の御事ふる事申すも更ふるふ其玉津  
日女命と申すハ彼三女神を玉依姬命と申奉るふ同  
し由石百五十ふ注る如くふり是其第二證ふり又  
完太郡小奪谷葦原志許乎命與天日槍命二神相奪此  
谷云くと又伊奈加川葦原志許乎命與天日槍命占國之

△て見え御方里の下  
小葦原志許乎命  
與天日槍命到教黑  
土志嵩て云文

時有嘶馬過於此川故曰伊奈加川有ふとふハ葦原  
志許乎命と天日槍命とを相並べ云るふ其同じ事を  
當郡波加村の文ふ占國之時天日槍命先到處伊和大  
神後神前郡多馳到云くと又御方里の下葦原志稗岡者伊和大神  
與天日槍命二神各發軍相戰云くと有ふど是ハ伊  
和大神と天日槍命と相連ぬ舉たる是其第三證ふり  
然して上百三十ふ舉たる一饒磨郡伊和郷の文ふ右号  
伊和部者積ミササキ嶮郡伊和君等旗到來居於此故号伊和部  
と有る伊和君ハ其等旗の伊和部の長ふるが其伊和  
里の本をハ神酒村と云けれハ彼三輪君たる事云も



更ふり彼峯相記ふ載せる如くハ欽明天皇御世ハ伊和恒郷と云一人有ふり此ハ其伊和君の有つる由來ハ垂仁天皇三年御紀の細書ハ初天日槍乘艇泊于播磨國在於宍粟邑時天皇遣三輪君祖大友主與倭直祖長尾市於播磨國云くと有る此天日槍命ハ此記の趣ハ己ハ神代の始ふりけれバ紀記の趣共ハ難信事上百四十ハ己ハ注るガ如クふれバ此大友主命長尾市宿祢を被遣ハ其伊和大神の祭祀ふどの御事ハ依て給ひけむを神代ハ右の二神の故事の此ハ在る事ふりけれバ其事ハ隠れて天日槍命の故

事ハ其御世の事ハ傳誤れる者ハこゝ諸其大友主命ハ地神本紀ハ素戔嗚尊十一世孫大友主命此命磯城瑞籬朝御世賜大神君姓と有て即大田根子命の孫ハて即伊和大神より十世孫ふりけれバ其祭祀ハ來る事ハ然も有べきハ長尾市宿祢ハ崇神天皇七年御紀ハ以市磯長尾市為倭大國魂神之主と有て本より大國魂神ハ仕奉る人ハ有けれバ此大名持御魂神の祭ハ赴く事實ハ其謂ハ有る御事共ふり然レバ伊和君の此其部を率て此地ハ在ハ右の時ハ起れる者ふりけり此伊和君同族ハ三輪君ハ播磨國ハ猶能ハ石書ハ求む可

△猶下五百注ヤヲ考合テ可



事ふりりし攝津國伊武庫郡伊和志豆神社若狹  
 國遠敷郡彌和神社因幡國高草神社郡伊和神社等ハ  
 當社より起り又當國明石郡赤穂郡伊和郡比賣神  
 社御在り坐ハ此大神の后神御在り坐す御事ハ申  
 すも更ふり又上九十八丁小注る但馬國粟鹿神社名  
 神大也此不起りて伊勢國多氣郡伊佐和神社志摩國  
 答志郡粟島坐伊佐波神社二座名神大の本也此ハ在  
 と見ゆれハ此大己貴神の御事跡ハ於てハ此伊和社  
 小勝れるあり御又和名抄小土方郷有り風土記柏野  
 在り坐ざりける  
 里の次小伊奈加川葦原志許乎命與天日槍命占國之  
 時<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>嘶馬過<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>此川故曰伊奈加川土間村神衣附土上  
 故曰土間<sub>ト</sub>有<sub>ル</sub>此土間村を云ふる可<sub>ク</sub>右の伊奈加  
 川ハ嘶<sub>イナカ</sub>處<sub>カハ</sub>川の義ふる可<sub>ク</sub>諸此二柱神御在り坐たる  
 御前を嘶馬の過ればとて川名を負<sub>ヒ</sub>事ハ尋常の馬

神大月次新嘗

とハ思<sub>フ</sub>く<sub>ク</sub>ず若くハ傳十四<sub>百三十</sub>小注る彼大伴  
 社記ハ謂<sub>フ</sub>ゆる龍馬ふどの事ハ非りける小や龍馬  
 ハ月夜見大神の御牧望月小始て放せ給へる者ふれ  
 バ故有べ<sub>ク</sub>若て此二柱神の占國之時と有<sub>ル</sub>考ふる小  
 境城の御爭共の御在り坐けるを其川を龍馬の渡る  
 を見行ハ<sub>ク</sub>御在り坐て其方境を石給へる者ふる可  
 く石の土間村の下小神衣附と有<sub>ル</sub>附ハ村を誤れる  
 くて二村を相並べ云ふる可<sub>ク</sub>土上故曰土間と有<sub>ル</sub>  
 土の上<sub>ハ</sub>位<sub>ハ</sub>不當<sub>ル</sub>故<sub>ニ</sub>眞土<sub>ト</sub>云<sub>フ</sub>ガ如<sub>ク</sub>意<sub>ト</sub>聞<sub>ケ</sub>也  
 此神衣村と云ハ大己貴神の天神の御祭ふど仕奉<sub>ル</sub>

日本書紀傳三十

〇百七十七



△の事ハ賀茂郡河内  
里の丈ハ此里之田不  
敷草下也子所以然  
者住吉大神上坐之時  
食於此村下從神等  
人前置草緝散爲  
坐時草主大思計  
於大神判曰沙田苗音  
必雖不敷草如敷草  
生故其村田今不敷  
草作苗代有草ヲ  
敷く事上古の常あり  
右神衣村の事小就て  
思寄けり

△小言守列敷見え  
出雲神賀詞も伊  
豆能真屋不爲草  
伊豆能席登草  
敷支ふど有も清さ  
草と敷ふり

せ給へりし神服殿の地ふるく其次ハ敷草村敷草爲  
神座故曰敷草此村有山云く有て其敷草△大嘗祭  
儀大嘗宮條ハ其神座の御事を鋪地以束草所謂阿以  
播磨竹篁加其上竹篁上加席と有る是ふり神座の事  
ハ天智天皇九年御紀ハ於山御井傍敷諸神座而班幣  
帛と有る是ハて神祇の御座を設る事ふり此ハ敷草  
神衣の二村有る事必然なる御政の御在り坐けるふめ  
り又上傳十五箇引馬見岡神社四月神祭宣文下因造乃新造奉禮御室仁天乃△ハ敷草  
引る筈郡伊和郷の文ハ所以号手  
引丘者近國之神到於此處以手引草以爲食薦故云手  
引と有る食薦ハ大嘗祭儀ハ謂ゆる葉薦の事ハて

供神の物を置く料ふり其行立儀ハ次食薦并置篁一  
荷と有て置篁の上ハ敷豆了者ふり右ハ近國の神の  
御在り坐て物爲させ給へるを以見れハ大己貴大神  
の當昔己ハ大嘗祭の如き大御政ハ御在り坐けるふ  
りけり右百六十ハ引る庭音村本名大神御粮枯而生  
糲即令釀酒以獻庭酒而宴之故曰庭酒村今人曰庭音  
村と有る庭酒ハ新嘗の神酒ふり獻ハ天神を祭らせ  
給へるふり宴之と云ハ諸神と共ハ新嘗の宴會を設  
させ給へるふり神名式ハ完粟郡神庭田神社御在り  
坐ハ必其地ふる可くして即新嘗田の事ふるも右件



△但風土記ハ右の上  
又中又下を中又中  
ニ又下中と云々如  
見也  
△御在坐故伊和  
大神子對て神后と  
申奉る地名或り  
郡名と成れる可  
く借此也

の御事共小悉小打合て實ふ其大神の遠き神代の御  
有状を今も見奉る心ちして甚可畏くふむ右の土上  
間と云事ハ猶心行ざるを以て考るか真ハ真熊野真  
教原ふと云ふ真ハ實の義小して事の空虚く  
ざる謂ふりけり上の地ハ物も能出来る由を以て  
真土と云べきを置替て土真とハ云ふ可く此記  
小土地の位を或ハ上又ハ中ふと云ふ等小分て  
今も諸国の地を檢知る法是ふり予ガ本生の國小  
ハ田畑の位を定たる小上上と上物と上下と中と中  
と中下と下上と下と下と下と九等ふる此法と同  
ふき又和名抄小神埼加無郡見ゆ風土記小云く神前  
郡石所以号神前者伊和大神之子建石敷命山使村在  
於神前山乃因神居為名故曰神前郡と有る建石敷命  
ハ託賀郡法太里又癩坂の下小謂ゆる建石命是ふる

可うが御祖の事詳ふくず上百六引る諸佐容郡有  
濃里土上大神之子玉足日子玉足比賣命生子大石命  
ハ同神り此大神之子ハ大石命小係る可く其ハ玉足  
比賣命ハ玉依姬命の御事と聞えたる以て思ふ小玉  
足日子命ハ伊和大神を称奉ると思へければふり猶  
次百八十高野社の所ふて委く注す可く山使村在  
於神前山ハ在於山使村神前山と有べき因神居為  
名ハ神前ハ神境と云事ふて此神の主領る御在坐  
す地の謂ふる可く同抄埴岡郷有り同記小神前郡聖  
岡里云く所以号聖里者昔大汝命與小比古屋命相争



云擔<sup>ニ</sup>聖<sup>ノ</sup>荷<sup>ヲ</sup>而遠行與<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>尿<sup>ヲ</sup>而遠行此二事何能爲乎大  
汝命曰我不下尿欲行小比古尼命曰我持聖荷欲行如  
是相爭而行之逕數日大汝命云我不能忍行即坐而下  
尿之尔時小比古尼命咲曰然若亦擲其聖於此岡故号  
聖岡又下尿之時小竹彈上其屎行於衣故号波自加村  
其聖與屎成石于今不亡と有る大汝命與<sup>シ</sup>小比古尼  
命相爭云ハ互ハ難堪ク難忍ク事を成<sup>ル</sup>て相挑<sup>マ</sup>せ  
給<sup>ヒ</sup>て其御力入の程を試<sup>ミ</sup>させ給<sup>ヘ</sup>るふて各國土  
經營の御業を練磨<sup>ガ</sup>せ御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>けるふれバ戲事の  
如<sup>ク</sup>中<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>味<sup>ハ</sup>ふ可<sup>ク</sup>御事<sup>ニ</sup>御在<sup>リ</sup>坐<sup>テ</sup>ア狀<sup>ハ</sup>ふり

けれ若<sup>ク</sup>一柱ハ數日尿放給<sup>ハ</sup>ズ一所ハ數日重荷を  
擔<sup>ヒ</sup>御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>る其御辛苦の狀を見奉<sup>リ</sup>知<sup>ベ</sup>きふり  
彼戮<sup>カ</sup>一心<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>御力の限を盡<sup>コ</sup>させ給<sup>ヒ</sup>御心の  
表裡無く相睦<sup>ハ</sup>せ御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>ける<sup>程</sup>ふ心實<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>將  
欲<sup>ク</sup>御中間<sup>ハ</sup>御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>ける又神前郡聖岡里湯川  
昔湯出<sup>ル</sup>此川故曰湯川<sup>生</sup>云<sup>ト</sup>有<sup>ハ</sup>此所<sup>ハ</sup>御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>  
て當昔温泉を開<sup>ク</sup>て給<sup>ヘ</sup>るふめり又此里<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>野  
之岑<sup>ハ</sup>も御在<sup>リ</sup>坐<sup>シ</sup>ける上<sup>ニ</sup>百四十<sup>ノ</sup>引<sup>ル</sup>揖保郡稻  
種<sup>山</sup>大汝少日子根命ニ柱神在於神前郡聖里生野之  
岑望見此山云彼山者當置稻種即遺稻種積於此山



△埴土を置て給へり

形亦似稻積故号曰稻積山と有る是ふり此等の故事  
の然相重ふるを以見れば二神相並御在り坐て國作  
給へる御座所ハ此埴岡郷ふりけるふり又此聖里  
り云く神前郡聖里一家云品太天皇巡行之時造宮於  
此里初云此土為聖耳故曰聖岡と有る一家云ハ一説  
を擧たり者ふり此土為聖耳とハ此土地ハ埴止の  
こ有り詔給へるふり詔ハ少彦名命の遠くより  
檐ひ御在り坐ける地ふり給へりて地名の元由と  
りふり然大御言を詔給へりて地名の元由と  
成りたり云ハ其故事ハ徒事と成る者ふり但此を  
も彼をも立る時ハ其二柱神の埴土以て岡山と成り  
給へるを見行ハて實ハ聖岡と詔給へりて見る  
や然る可くしむ楮名義抄ハ聖字ハ久年又能叙年と  
有て波ふの訓無れども埴と石の又陰山郷有り埴土  
聖と音の近きを以用ひたるふり  
記ハ陰山里岡云曹岡者伊與都比古神與宇知賀久年

豊富命相聞之時曹墮此山岡故曰曹岡と所見たる伊  
豫<sup>與</sup>都比古神ハ神名式ハ伊豫國伊豫郡伊豫豆比子命  
神社と有る此神ふり其風早郡ハ國津比古命神社も  
同神ふる可きハ一ハ伊豫の國号を以て神名ハ称へ  
一ハ其國神の謂を以て負奉る御名ふるハ其並ハ櫛  
玉比賣命神社御在り坐ハ櫛玉ハ其夫神櫛玉饒速日  
命の御名を曹<sup>ヨ</sup>せらふて大和國添下郡矢田坐久志玉  
比古神社二座並大月と有ハ饒速日命ふて渡りせ給  
へる由已ハ傳せ一六十三丁ハ注るガ如く斯るハ國造本  
紀ハ風早國造輕島豊明朝<sup>朝</sup>物部連祖伊香色男命四



世孫阿佐利定賜國造と有し續後紀小養和六年十一月癸未伊豫國人外從五位下風早直豐宗等賜姓善宗朝臣天神饒速日命之後也と所見なる此を以見る時其國津比古神社ハ饒速日命ハ渡りて給ひ伊豫豆比子命神社も其神ハ御在り坐す由此ハ知るとふり若て其宇知賀久年ハ打圍又云事ハて(リ)戸と云む發語ふるくと思ゆる事ふれども猶此ハ宇知ハ若くハ宇和津彦神の宇和安を誤れるふて久年ハ命の示裂なり本ハ伊和ふり賀ハ彼安和賀比賣命の妖神の謂ふる可くや然る時ハ右の安和賀命ハ伊和大神の御事ふて豊富命ハ別神ハ

渡りて給ひて此ハ二柱並坐るふり若て此神前郡ハも次ふる多馳里の下ふも伊和大神ハ天日槍命と相戦給ふ由所見なる其ハ別事ハ非ずて其同ハ時の御事ハ有れども一ハ安和賀命と伊與都比古神との御名ふて相傳ハれるふこりハ有けの其天日槍命ハ饒速日命九百四十の考ハ上九丁ふ云り右の豊富命ハ次ふる的部里條ハ豊穗命と作る是ふり曹落此里岡と有る曹ハ和名抄征戰具ハ曹説文云曹和名加首鎧也と所見なる是ふり右の蔭山里の事ハ別ハ蔭山品天皇御蔭隨此山故曰蔭山又号蔭圍除道及鈍仍云磨石布理許故云磨石布理村と云事有り此蔭山ハ

○日本書紀傳三十一

○百八十二



△又銘磨郡安相  
里修小呂太天皇  
云、縁道不撤御  
冠故号陰山前  
と有る是御冠  
を御蔭と云ふ  
り又託賀郡法  
太里云、讚伎  
日子與建石命  
相聞之時建  
石命逐此坂云  
自今以後更不  
得入此界御言  
置此坂と有る  
曹ある可き事  
云も更あり然  
九六曹をも冠  
を共の御蔭と  
云へき状ありけ  
り猶

出雲風土記云神門郡陰山郡家東南五里八十六步大  
神之御蔭也と有て次小冠山郡家東南五里二百五十  
六步大神之御冠と云事も所見て冠の上小挿了日蔭  
を採了山の謂ふり此ふるハ應神天皇の御蔭此山  
小隨<sup>積</sup>る由以て名と成れる者ふて石の出雲ふると  
ハ異ふれども其御蔭の事ハ一ふり然るハ同ハ地ふ  
曹岡の有を思へハ若くハ磨布理村の事のみ品太夫  
皇の故事ふて蔭山の事ハ神代のふくむも知べり  
ず御蔭の事ハ傳十九又和名抄小的部郷有り風土記  
卷四百四十六丁小云り  
小云く<sup>石坐神山</sup>的部里 土中、右的部等居於此村故  
曰的部里と有て此地小石坐神山高野社の立せ給へ  
る由ふり其次小的部云く高野社者此野高於他野又  
在玉依比賣命故云高野社<sup>生槐</sup>云石坐山者此山載石  
又在豐穗命神故云石坐神山と所見なり其高野と云

所由ハ地形の高き小因れる事石の説の如く玉依比  
賣命と申奉るハ傳十五 百九十六丁二百十七 五十  
十八 五十八丁小注奉るが如く宗像大神三柱を合  
せ奉りて玉依姬命と申奉れる彼天照大神と素戔嗚  
尊と御誓の御事御在り坐ける御時小其物根ハも  
彼瑞八坂瓊之曲玉小依て成出させ御在り坐ける由  
の御名ふるを此小上 百四十 六丁 小引る美囊郡<sup>の文</sup>高野里  
坐於祝田社神玉帶志比古大稻女玉帶志比賣豊縮女  
と有る此比古比賣二神ハ又石 百五十 七丁 小引る讚容郡  
の文小大神妹妹二柱各競石國之時妹玉津日女命云

陰  
冠



く有る此玉津日女命ふむ其玉帶志比賣命合れ  
バ此御由縁依て其妹<sup>妹</sup>神をも玉帶志比古命と稱奉  
れりけむと思ふきを又其<sup>百六十丁百七十九丁</sup>小擧たる<sup>文</sup>同郡  
有濃里<sup>中</sup>大神之子玉足日子玉足比賣命生子大石  
命云く有る大神之子ハ大石命係れる文ふて此  
夫婦二神ハ大石命の御祖を示さむ爲ふ出たりふて  
是將伊和大神妹妹二柱の御事ふりければ上件の如  
きハ共小皆同神の御上ふて様ふ傳の異ふるふづ  
有ける故其玉帶志比古命玉帶志比賣命をも此妹  
妹二柱神の御事と爲て今云ふ所以ハも神名式小

筑後國三井郡高良玉垂命神社<sup>名神</sup>本國神名帳小三  
瀨郡正六位上玉垂媛神御在坐を筑前國上座郡福  
成神社記小三女神<sup>中</sup>出雲簸川より出て御鎮座の地  
を撰給ふ小御船筑紫の水沼小着ぬ<sup>中</sup>此小宮社を建  
て玉垂宮と稱了日本紀小水沼君の所祭神と書せり  
ハ即此御社の事ふり<sup>中</sup>畧筑後國三井郡神社ハ物部膳  
咋宿禰を祭る所ふり相殿小武内宿禰坐す物部膳咋  
<sup>宿</sup>連祢七世孫物部阿遲古連詔を奉りて水沼君と成り  
三神の神主たりし時三女神を合祭りて高良玉垂宮  
と云ふ是よりして三井郡の社を上高良と云ひ三瀨

日本書紀傳三十  
〇百八十四



郡の社を下高良と云ふと云り右の下高良ハ玉垂媛  
神にして上高良ハ玉垂命神社の御事ふるが然る小  
文徳天皇実録ハ高良玉垂命神及比咩神と有を見  
小玉垂比古神玉垂比賣神と相並ぶ状ふりける小就  
て考ふる小豊比咩神社名神と有る其比咩神ハ御在  
し坐ける然る時ハ此小並坐す比古神ハ右小注る如  
く大己貴神小て渡りせ給ふ可き御事申すも更ふる  
を此古風土記を見小及びて始て心を定むる事右の  
如くふむ有ける若て右の石坐神山の神の事を豊穂命と  
申すハ上ふる蔭山里の文小字知賀久牟豊富命と有

る字知賀久牟ハ安和賀命を誤れる考有て右小己小  
注れハ豊富命ハ別神小て登與富と訓べき神名ふる  
小ころ事の因小云べく石の豊穂命ハ天孫降臨章小  
と云小就て思寄れくハ参河国風土記小宝飲郡石  
座神社圭田四十六東五字田所祭天雅彦也大宝二年  
癸寅九月始奉圭田行神事と有て又同郡御津神社圭  
田五十六東所祭下照比咩也天武天皇四年乙亥二月  
始奉圭田加神礼と有る御津ハ其女神の御在し坐す  
難波の御津ふり石座神社ハ若此石坐神小てハ非ト  
くとして今試和名抄神埼郡小槻田郷見えたりれども風  
土記ハ其郷無して多馳里と云見えたり多馳里バヤト粳  
岡者伊和大神與天日杵命二神各發軍相戦尔時大神  
之軍集而春稻之其更粳聚為丘と有ハ稻ハ飯根小て穀

合下百九十七小多可  
郡大津乃命神社  
郡良乃命神社  
御事を注せる小思  
合了可

和名抄神埼郡小槻田郷見えたりれども風

〇百八十五



ふぐふるを云ひ粳ハ和名抄米類ハ杭米本草云粳  
米一名粳米和名宇流之祢有る即麗稻ウレシネの義ハて其穀を去  
たる麗ハう縮の謂ふる由ふるハ字鏡を見れば粳  
を志良ハ米と有て即精米の義ふる其粳聚爲丘云  
ハ次の文ハ天日輝命の軍在ハ十と有る其ハ對給へる  
大神の御軍ふれば兵糧の決て多く御在り坐ける由  
此ふて知るハふり又下百九十ハ引る賀茂郡ふる粳  
岡の故事有れども此ハ別ふり次ハ所以云ハ十軍  
者天日輝命軍在ハ十故曰ハ十軍野と有ハ此多馳里  
の地名ふり軍在ハ十ハ天下ハ又比無き大己貴神

と相挑ませ給ふ神ハ坐せば其ハ十戈神ハも劣らず  
從神軍を多く率こせ御在り坐て屯ム給へり地ふる  
由ふり又云く多馳里所以云邑日野者阿遲須伎高日  
古臣命神在於新次神社造神宮於此野之時意保和知  
苜廻爲院故名邑日野と有る新次神社ハ即神名帳ハ  
載る所の式社是ふり新次ハ新鉏ハ上三十三ハ引る  
本朝事始ハ鉏須有天八鉏有神田齋鉏大己貴命與少  
彥名命同心合カ製之專爲民用と有る此鉏の事ハ  
此ハ素戔嗚大神より五百津鉏神鉏とて御父大神へ  
国作の表物と爲て賜へるを此神の其事を受継仕奉



△石百引る護密  
郡邑山里小然金柄  
川神日子命之盤柄  
合採此山故其山之川  
号曰金柄川之有也  
御神小御在坐  
思合了可

△其丁武路我夜  
乃都留能都追美  
乃有八室草之  
草曼之草部之云其  
草曼ハ葛藤を云ふ  
るをも思合了可

しせ給へる故小御名小味兼と負せ給へると一意小  
て新鉏神と称申了亦名の御在し坐けるふりけり意  
保和知ハ大嫩オホノ弟ナリふて浅茅を云ふる可し和ハ手弱女  
手弱タワヤカメ肱ふどの弱と同一く嫩弱ニラカふる義ふて万葉十四  
二十小宇奈波良乃根夜波良古須氣と有と同一格ふ  
五丁小廻ツクシキリヤ爲院ハ儀式齋郡八神殿葺以音草云部廻以葺と見え高  
萱御倉小葺部以音草と次て次々の屋共皆然り又大  
嘗宮條小構以黒木葺以音草云く壁部以草云くと有  
て是即上古の宮造の状ふり邑日野ハ覆野の義ふる  
かて右の如く浅茅を以て屋ふる葺く壁ふる部にて

院造り爲させ給へる御事是ふり石の多馳と云名義  
く所以号多馳者品太夫皇巡行之時大御伴人佐伯部  
面等始祖阿我乃古申欲請此土尔時天皇勅云直請哉  
故曰多馳と有れども其ハ偶然ふて若くハ此神の  
御子大田根子命と云人有ハ本より多馳の号も  
有ふと云ふ又和名抄小多可郡有り風土記小云く託  
賀郡右所以名託加者昔在大人常勾行也自南海到北  
海自東巡行之時到來此土云佗土昇者常勾伏而行之  
此土高者申而行之高哉故曰託賀郡其跡處數々成  
沼と有る昔在大人ハ何れの神とも知れ給ハ了唯  
事迹の存れるふり自南海到北海自東巡行ハ此  
大天人の諸国を經歷り御在し坐る道次を云ふ佗土昇



△仁井之云ハ東西小海  
を見て最高き地  
ありけるガ

者常句伏而行之此土高者申而行之と有ハ地の低き  
處ふてハ屈曲カバより高き處ふてハ伸直りて巡坐故ハ  
此地の高きを愛て高哉の御言をハ舉給へるふり其  
踰迹處數ハ成沼と有ハ處ハ在ゆる跡處悉ハ沼を  
成すハ至れりといふり此古風土記を未見ざりける今  
年九月頃ハ有けむ己ハ傳世九百六十ハ書しける  
ハ予ガ本生國ふる我家の傳持る地の内ハ字ハ平と  
云處ハ大人の足跡として其石足ふて踏たる垠有り其  
土凹高こ地こハ在れども雨ふどハ水ハ溜りて沼とも云り云  
べう狀ふりけり予も知くて家ハ在り時屢見たる事

序

△帝陸風土記那  
賀郡條ハ平津  
驛家西二里有  
因名曰大櫛上古  
有人体極長大  
身居丘壘之上  
云々其大人踐跡  
長卅餘歩廣卅  
餘歩尿穴趾可  
中餘歩許と見  
元出雲神社順  
崎記と云物ハ出  
雲郡阿受使神  
社今神門郡邊  
堀村と云ふ其  
櫛戸谷の上の山  
ハ彦治足跡と云  
有ハ足跡土地  
ハ著て五指の  
分ちエ不踏ハ  
爲分明あり長  
九寸間又指縫

有き領主の命ハ依き近年田ハ墾たりけれども五指  
の跡ハ更ふり全体の足跡ハ失ハざる由あり其より  
一里許東北ハ上山村として又高き村有り其地ハ石  
足の跡是も詳ハ在ハ海を隔てて播磨國三木郡神  
出と云山中ハも左右ハ知ぬども大人の跡と云物有  
て淡路より彼處ハ踏越ハたる事を人皆云傳ふる事ハ  
るガ今迄此ハ地の増たる狀の偶似たるうハ然云ハ  
事ハ疑思ハなり右と云ハ右足跡ハ大背ハ  
郡國田村ハも有ハ右と云ハ右足跡ハ大背ハ  
熊之入ハなりと見ハ今當ハ其跡ハ踏ハ  
ハ味相高ハ根神ハ河野の事ハ神ハ  
有ハ事ハ神ハ物ハ登ハ川元來阿登



△仁井云ハ東西ノ海  
を見て最高キ地  
ありけり

者常勾伏而行之此土高者申而行之と有ハ地の低キ  
處ふてハ屈曲カバより高キ處ふてハ伸直りて巡坐故ハ  
此地の高キを愛て高哉の御言をハ舉給へるふり其  
踰迹處數ハ成沼と有ハ處ハ在ゆる跡處悉ハ沼を  
成すハ至れりとふり此古風土記を未見ざりける今  
年九月頃ハ有けむ己ハ傳世九百六十ハ書しける  
ハ予ガ本生國ふる我家の傳持る地の内ハ字ハ平と  
云處ハ大人の足跡とて其石足ハ踏たる垠有り其  
土凹高こ地こハ雨ハふハどハ水ハはハ溜りて沼とも云り云  
べう狀ふりけり予も知くて家ハ在し時遠屢見たる事

并

△帝陸風土記那  
賀郡條ハ平津  
驛家西二里有  
田名曰大藪上古  
有人体極長大  
身居丘麓之上  
云其大人踐跡  
長卅餘歩廣十  
餘歩尿穴趾可  
中餘歩許と見  
元出聖神社順  
崎記と云物ハ出  
雲郡阿波使神  
社今神門郡遠  
堀村と云ふ其  
樽戸谷の上の山

有キ領主の命ハ依キ近年田ハ墾たりけれども五指  
の跡ハ更ふり全体の足跡ハ失ハざる由ふり其より  
一里許東北ハ上山村とて又高キ村有り其地ハ石  
足の跡是も詳ハ在ハ海を隔てハ播磨國三木郡神  
出と云山中ハも左右ハ知ねども大人の跡と云物有  
て淡路より彼處ハ踏越てたる事ハ人皆云傳ふる事ハ  
るガ今迄此ハ地の増たる狀の偶似たるうハ然云ハ  
事ハ疑思へりハ石ハ自南海到北海と  
云ハ実ハ合るころ争がい難キ事ふりけれ又三葉  
松と云ハ三河國の事を誌せる物ハ登栢川元來阿登



川ふり大己貴命諸國を巡給ふ時の御足跡今諸國に  
在り御足跡池鮎野に在りと云るハ彼神名式に謂ゆ  
る碧海郡知立神社の傍に御手洗に云る長き沼の有  
る其を云ふる可く然れば此外にも猶諸國にも在る  
者<sup>に</sup>所見たり但石の大人の足跡と云ハ大己貴神と  
も難定事ふぐ斯る可畏き大神の御上ふてハ御  
身を大ふる小めも其事<sup>の</sup>狀に隨ひて使はせ給ふ御  
事の御在り坐せば此大神の御事と見奉らむる強説  
ふハ非ず右の二葉松の文ハ塵添塩囊抄にも見え  
れ<sup>ハ</sup>右の今諸國に在りと云るハ其抄を書せり時  
の今ふれば此播磨<sup>唐</sup>のふじをもち心留て云る者ふる可

南に僅小里にして南海の續多れば此に於て跡有るふめり又其

楮石の仁井村より上山村ハ東北より其より神出  
ハ正北より其神出より多可郡を指す時ハ西に當れ  
巡行と有る由無ふハ非ず又同抄荒田郷有り風土  
記の當昔ハ未郷名に非ずして村名なり風土記に云  
く賀負里荒田村所以号荒田者此處に神名道主日女  
命无父而生兒爲之釀盟酒作田七町七日七夜之間稻  
生熟竟乃釀酒集諸神遣其子捧酒而令養之於是其子  
向天目一命而奉之乃知其父後托荒其田故号荒田村  
と有る賀負里ハ和名抄に謂ゆる賀美郷の事と聞ゆ  
若然れば負ハ眉を誤れるくと見ふ其里<sup>下</sup>の文に賀負  
山<sup>大海山</sup>荒田村上下上右由居川上爲名略と有れば當昔ハ



加夫と讀たりけし。儲此道主日女命と申す。國主  
日女命と申す。如くふれば伊和大神の御女。御  
祖ハ次云。黒田里。御在。坐。宗形大神。御在  
坐。御事ハ瑞珠盟約章第三一書。其三女神の  
御事を道主貴と所見。其貴を去て。姫の言を加へ  
たる御名。渡りせ給へれば。ふり紀記。漏たりと  
雖も此大神の生給へる女御子。下照姫命の外。も  
猶又御在。坐。天目一命の右神。成りせ御在。  
坐。けるふりけり。元父而生子。其女神の御父母二神  
の爲。こせ給へる。元て。山城風土記の故事。似

事此三字衍字似たり。其元父而生兒。爲之釀盟酒。云事ハ傳カ  
六二百丁。注るが如く。山城風土記。謂ゆる。建角身命  
の御女王。依日賣命の丹塗矢。遇給ひて。御子生給ひ  
し時。其御父を知。將欲ひて。諸神を集へて。物爲  
給へる事。本朝文集。乃造宇氣比酒。令子持坏酒。供  
父と有。一。て盟酒を。此。諸神。令飲。る。何  
心無き。幼稚心。其思。方。持行。めて。即其酒坏を  
向。神を。以て。父を。知給。ひ。御計。ひ。て。是。其盟酒の  
盟酒。たる。所以。ふり。天目一命。ハ神名式。天目一神社  
と有。を。口訣。天目一箇神。在播磨國。多可郡。と注せる



是ふり但此神ハ天孫降臨の時小供奉りて天降り  
 御在る坐たる状ふり此ハ其より以前の事ハ有け  
 れバ其御霊の天降り御在り坐る來小其道主此日女  
 命小娶給ひし故小其御御子ハ坐坐父母二神の此盟酒を進給ふ  
 御時小頭ハれさせ御在る坐けるふふむ有べりりけ  
 る此神の御事ハ己小傳十五二百七丁小注せり又神  
 名式小佐用郡天一神玉神社と有も其同神と聞えた  
 る小天一神ハ天目一命の略ふり玉ハ御霊の義おて  
 其日女神の遇給へるハ石小謂る御霊神の由ふる小  
 文德天皇実録小天安元年八月乙丑朔庚辰在播磨  
 國正六位上天一神授從五位下同丁亥在播磨國從

又神名式小賀茂郡  
 菅田神社有り姓氏  
 録小菅田首天久斯  
 麻比止都命之後也  
 と見之今も賀東郡  
 菅田村と云有ふと  
 大小去難き所以有  
 る事ありし

五位下天一神預官社と有れバ此小元より御在り坐  
 ける御霊の通ハせ給へる傳三十三卷百九十一丁  
 小定むるを待べし此を和名抄小天一神百鬼經云和  
 名奈加美と有る其事小當て云ふとハ邪説ふり取  
 非ズ△和名抄の如きは賀美那加資母の三郷有り  
 雖も此記ハ載せず但右小舉たる賀負ハ賀眉を誤  
 れる小て賀美郷ふしむを那加郷資母郷ハ此記ハ  
 都麻里花浪里端鹿里雲潤里と有る此四ハ右の二郷小且に云は即古名ありけむも知べし  
 其文小云く都麻里云く所以号都麻者播磨刀賣與丹  
 波刀賣堰國之時播磨刀賣到於此村汲井水而食之云  
 此水有味故云都麻と有る此播磨刀賣ハ此國神ふる  
 可く坎又其丹波刀賣ハ次小謂ゆる氷上刀賣の事ふ



る可く堰國と云ハ此多可郡と丹波国氷上郡とハ各  
山頂を堰ふして相隣れる地ふりければ其界を立給  
へる謂ふる可く此水有味ハ倭姫命世記ハ其河  
之水寒有<sup>支</sup>則寒河止號<sup>支</sup>と有<sup>支</sup>が如く水ハ寒冷<sup>ツメキ</sup>を尚  
ぶ者<sup>ふ</sup>ハ有<sup>其ハ</sup>ければ其語を省きて都麻とハ云ふる可  
く又云く都麻里云都太岐者昔讚岐日子神詔氷上  
賣<sup>ル</sup>時氷上刀賣答曰否日子神猶強而詔之於是氷上  
刀賣怒云何故吾即雇建石命以兵相闘於是讚岐日子  
負<sup>ル</sup>而還去云我其怯哉故云都太岐と有る讚岐日子神  
未思得ず氷上刀賣の父祖詳ふ<sup>下</sup>建石命ハ上<sup>十百七</sup>

下引る神前郡の文ハ伊和大神之子建石敷命是ふ  
めり怯ハ四神出生章第十<sup>一</sup>書ハ伊弉諾尊の御言ハ  
も始爲<sup>レ</sup>旗悲及思哀者是吾之怯矣と有る女神を慕ハ  
セ給へる事ハ詔給へり都太岐ハ都太岐<sup>久都太</sup>と當昔ハ活  
きける<sup>下</sup>又ハ那を略ける<sup>下</sup>猶考ふ可く次ハ法太里  
所以名法太里者讚岐日子與建石命相闘之時讚岐日  
子負<sup>ル</sup>而逃去以<sup>下</sup>子畱去故云畱田と有る右の軍の時ふ  
るが以<sup>下</sup>子畱去とハ負<sup>ル</sup>軍して怖<sup>下</sup>の<sup>下</sup>懼<sup>下</sup>れたる状あり  
又云く甕坂者讚岐日子逃去之時建石命逐<sup>下</sup>此坂云自  
今以後更不得入此界即御冠置<sup>下</sup>此坂と有る甕坂ハ御



冠坂の略ふり御冠ハ古事記御身滌段小次於投棄御  
冠所成神云々又出雲風土記小神門郡冠山郡家東南  
五里二百五十六步大神之御冠と有て此ハ大神之御陰也  
と云る陰山と並へる事石百八十 蔭山里の下小云る  
が如く又此小も御冠と云り此ハ御軍の威を示給ふ  
爲小置せ給へるふれが御曹を云ふや有む彼（笏磨）揖保郡  
伊和郷十四丘の文小曹落處者即号曹丘と有て御冠  
を云る神前郡蔭山里の下小曹丘者云く相闢之時曹  
墮此岡故曰曹丘と有と此とハ一ふして御闢の時の  
具ふれが御冠ハ此ふてハ御曹を云ふりけり又云く

法太里花波山者近江國花波之神在於此山故因爲名  
と云事も所見たり此花波之神ハ下百十丁（引）賀茂  
神云く云所小就郡川合里の文小花浪神之女淡海  
在れ頭上小冒る物を云て後世の如く定れる制度ハ  
無りふり出雲神賀詞小伊都幣能緒結天乃美賀秘  
冠利天と有が如く本ハ加賀布留と云用語を一種の  
物名ふりて冠と云ふれハ髪ふどの如きを冠と云  
ひ又ハ石の如く曹をも上小冒る由を以て冠とハ云  
る者又云く端鹿里上中今在其神石号端鹿者昔神於  
諸村斑菓子至此村不足故仍云間（ハルカト）有哉故号端鹿此村  
至于今山木無菓子生真木挽（杉）と有る端鹿ハ波志加  
と訓べくして下小間有哉と詔給ひく御言の略ふり  
今在其神ハ此端鹿の言を詔給ひく神其里小御在く



坐りふり此神と申すハ此國作の御時よりハ甚く古  
き御事にて此第五一書小謂ゆる御父素戔嗚大神の  
彼木種を播生し給へりし御事と所見たり於諸村斑  
藁子と云ハ右小夫須噉八十木種皆能播生と有る是  
ふり至此村不足と云ハ傳廿八十小注るが如く其  
大神の木種を分布し御在り坐ける狀ハ各諸國の  
地小殖給ひて其木を生立しめ又其実るを以て次小  
及ぶし給ひ如此くして殖次小巡し御在り坐ける狀ふ  
りければ間有哉と詔給へる如事御ハ時として必御在  
り坐べき自然の勢にて其御時の消息御実小直小見奉

り知るゝ如くふむ有ける山木無藁子生真木抱杉と  
有る真木ハ其一書小被可以爲頭見蒼生奥津葉戸將  
臥之具と有る是ふり杉ハ杉及櫟樟此両樹者可以爲  
浮室と有る杉是ふり次小云く雲潤里土中右号雲潤  
者丹津日子神法太之川底欲越雲潤之方云尔之時在  
於彼村太水神辞云吾以完血佃故不欲河水尔時丹津  
日子云此神倦堀河事云尔而已故号雲弥今人号雲潤  
と有る丹津日子神ハ釋紀小引る風土記小國堅大神  
之子尔保都比賣命と有ハ此小謂ゆる埴山姫神にて  
渡りせ給ふ由傳九三十三廿八十小注るが如くして其



ハ軻遇突智神の后神小御在り坐マハ佗小彦神の御  
在り坐ベキ小非レバ此ハ其丹生の地を主領る國神  
小こゝハ御在りけめ太水神の大ハ大の誤て大水  
神ハ在於彼村ハ法太里小御在り坐由ふるが右小引  
る法太里花波山者近江國花波之神在於此山マ有る  
此神マ思りき由ハ神名式小近江國高島郡波尔布神  
社大水別神社並給へるも此小合ひ又伊香郡小丹  
生神社二座大水別神社御在り坐セバ若其大水神マ  
申引此大水神ハ御在り坐りむう以完血佃ハ上  
百五才小引る讚容郡の文小捕卧生鹿割其腹而撞

△其丹生の地を主  
領る給ふ

稻其血仍一夜之間生苗と云事有り楮右の丹津日子  
神ハ土神小御在り坐す故小水を引ハ悉小勞りセ  
給ふ可きを太水神ハ水を掌れる神小坐り然る業  
をバ爲させ給ハごむも水ハ心小任で給へる故  
小吾以完血佃故不欲河水マ慨よ宣へる故丹津日子  
神ハ此神倦堀河事云尔而已ハ詔給へるふり 借此  
土記の明石赤穂美囊三郡のハ今欽て傳りごるを  
彼釋小引る尔保都比賣命の御在り坐けるハ美囊郡  
ふる可り其郡の東小丹生山マ云有り攝津国ハ部郡  
の界ふり其山の東麓を丹生山田と云て此ハ攝津の  
分ふるを以て播磨小属る方ハ本より丹生ふる事を  
曉る可し斯りけハ其名高き丹生山ふむ上古より  
尔保都比賣命の御在り坐る地ふる此の丹津  
日子神ハ國神の御事を所見たり國堅大神と申すハ

○日本書紀傳三十

○百九十五



本よりニ柱御祖神小渡り又和名抄小黒田郷有り風  
セ給ふ御事申すも更ふり土記小云く黒田里袁布山者昔宗形大神奥津島比賣  
命妊伊和大神之子到來此山云我可産之時訖故曰袁  
布山と有る宗形大神奥津島比賣命ハ彼謂ゆる須勢  
理毘賣命の御事ふして始より此大己貴大神の後の  
御政を助奉りて給ひて國造の御事ふも萬の御業小  
も大神と相半りて貴く高く廣く厚き御功の御在  
り坐て甚く可畏き大神小渡りて給ふが故小伊和太  
神と相並べて宗形大神と崇まへ奉れるふり此記小  
大神と申すハ此ニ柱神と彼國堅大神と御蔭大神阿

△右百八十ノ謂ゆる  
道主日女命と

菩大神の五神のいふて其餘ハ神と申し命と申すのいふり  
妊伊和大神之子ハ古事記小故此大國主神娶坐胸形  
奥津宮神多紀理毘賣命生子阿遲鉏高日子根神次妹  
高比賣命亦名下照比賣命と有る此高比賣命ニ柱神を生給ふ  
産殿をバ此地小構りて給へりけし右百八十小注  
る味耜高彦根神の宮ハ神埼郡新次神社是ふり又高比  
賣命の高ハ此託賀郡の託賀小同トきを大津乃命神  
社ハ若くハ此神小坐む石百八十の細書下引神多参  
河國宝飯郡御津神社を風土記小所祭下照比咩也  
云て難波の御津小も彼神の御在り坐ふと眞津即大



△下八百八 河波國郡賀  
郡宇奈爲神社の所  
不就て定む可き者あり

△上八百八 河波國郡賀  
郡宇奈爲神社の所  
不就て定む可き者あり

津ふる小又當郡加都良乃命神社天孫降臨章小謂ゆ  
る天稚彦門前所植湯津杜木思合了可<sup>レ</sup>但味耜高彥  
根神の産土ハ出雲と思しければ此ハ右の高比賣命  
を生給ふ御時ふめり可産之月ハ即臨月を云ふ訖ハ  
月の満たる事あり又云く云支閉丘者宗形大神云我  
可産之月盡故曰支閉丘<sup>キハ</sup>有る盡字ハ下の支閉小椽  
て訓へき事右の訖字の下小袁布の言を証し訓小等  
し支閉ハ古事記日代宮段倭建命の御歌小那賀<sup>所著</sup>邪勢  
流<sup>詠</sup>意須比能須蘓<sup>都</sup>紀多知迹邪理<sup>立</sup>有<sup>月</sup>小答奉りて  
河<sup>阿</sup>良多麻能登斯賀岐布<sup>來</sup>禮婆阿良多麻能<sup>來</sup>都紀波岐<sup>來</sup>閉

由<sup>行</sup>久云く意須比能須蘓<sup>詠</sup>都紀多<sup>月</sup>那牟余<sup>將</sup>有る是  
ふり此も其開胎<sup>ウハカツキ</sup>を過させ御在し坐ける由ふて右の  
袁布山<sup>故事</sup>の<sup>レ</sup>此も大抵同く意ふる者ふり斯る小當郡  
小宗<sup>形</sup>像大神の御社と思し<sup>レ</sup>御在し坐す神名式小  
兵主神社御在し坐ハ例の八千戈神小渡らせ給へハ  
此相殿ふても御在し坐く又古奈爲神社坐ハ出雲國  
神門郡久奈爲神社と同神<sup>レ</sup>猶能考ふ可き事ふり△又  
荒田神社ハ少彥名神小渡らせ給ふ由傳廿九<sup>百</sup>七<sup>十</sup>  
小己小注し奉るが如く右の如く正しく宗形大神<sup>ハ</sup>  
注せるが如く此ニ柱神を相對へて伊和大神伊和都  
比賣神と申し又ハ玉帶志比古命玉帶志比賣命又ハ

○日本書紀傳三十  
○百九十七



合下三百千六百小注  
 筑後國神井郡玉  
 命神社名神大豊  
 比咩神社名神大  
 有る豊比咩神を  
 名流難と申す由難  
 小見えたるを尾流  
 若栗郡黒田神社有  
 小民部者國帳小黒  
 明神云々皇極天皇  
 年三月初行神礼豊  
 津比咩命瀬郷  
 者流比咩命瀬郷  
 津比咩二座也有  
 右の黒田里云々の事  
 小抄ある迄合者ふ  
 可下二百九十五見  
 可

玉足日子命玉足比賣命と並べ申す此女神一所の  
 を申す小ハ玉津日女命玉依比賣命と申し又贗用都  
 比賣命ふど有る小各別神の如く見ゆる物々此  
 記を貫きて見小石の如く同神ふる者ふり克く前後  
 の文を照し應せ見小非和名抄小賀茂郡上鴨郷有り  
 ずハ難辨さ程の事ふり和名抄小賀茂郡上鴨郷有り  
 共小例の味耜高彥根神の御爲小所以有る地名ふり  
 儲上ハ下小對へたる称ふる小下鴨の方ハ一郷小立  
 ざりける小ころ風土記小上鴨里土中下鴨里土中右  
 二里云々下鴨里有碓居谷箕置之處者号箕置酒屋谷此大汝命造碓  
 稻香之處者号碓居谷箕置之處者号箕置酒屋之處  
 者号酒屋谷と有る此故事ハ聞えたる仕ふり又飯盛  
 嵩石号然者大汝命之御飯盛於此嵩故曰飯盛嵩と有

此二事ハ上百六十云々永郡稻舂岑又飯戸阜の  
 故事と相類たる事ふて共小伊和大神の御事ふり又  
 次小粳岡右号粳岡者大汝命令舂稻於下鴨村粳飛散  
 到此岡故曰粳岡と有る右百八十小引る神前郡多馳  
 里粳岡者伊和大神與天日杵命二神各發軍相戦時大神  
 之軍集而舂稻之其粳聚爲丘と有る同名小して事各  
 異ふり混ぶ爲べく又川合郷有り同記小川合里  
 腹辟沼有号腹辟者花浪神之妻淡海神爲追已夫到於  
 此處遂怨願妾以刀辟腹没於此沼故号腹辟沼其沼鮎  
 等今元五藏と有る花浪神の事ハ右百九十小注り上



件風土記不出たる國神の説ふり神名式崇健神社  
ハ上百九十四下百注るが如く揖保郡中臣印達神社神名  
 大因幡国邑美郡中臣崇健神社同く五十猛神ハ  
 渡りて給へり又石部神社和名抄ハ大神郷有り思合  
 才可ハ又乎疑原神社ハ風土記ハ萩原里云々ハ尔祭神  
 少足命坐ハ有ハ聞著ぬ神名ハ少彦名神ハ御在ス  
 可ハ右の賀茂郡の事ハ同記ハ所以ハ号賀茂者品ハ天皇  
上鴨里下鴨里の下ハ石二里号鴨里者ハ已詳ハ於上後分  
爲二里故曰上鴨下鴨所以品ハ天皇巡行之時ハ此鴨發  
飛於居條布井樹此時天皇問云何鳥哉阿從當麻品遲  
部君前玉答住於川鴨和令射時發一矢中二鳥即負ハ矢  
從山岑飛越之處号鴨坂落斃之處者仍号鴨谷煮因美  
之處仍号煮坂有る事ハふれども其神代より賀茂ト

云來る地ふハて然る事の有ハ愈其地の大名ト  
ハ成れるふハ可ハ國造本紀ハ針間鴨國造志賀高穴  
 穗御世上毛野同祖御穗別命兒市入別命定賜又美囊  
 國造ト有ハ以見ハ其以前ハ己ハ名有ハふり  
 美奈郡和名抄不出たり風土記ハ美囊郡所以号美囊  
 者昔大兄伊射報和氣命國之時到志深里許曾社勅  
 云此丘水流甚美哉故云美囊郡ト有る許曾社ハ比賣  
 許曾神ハ謂ゆる下照姬命の御事ハふれハ其項ハより  
己く御社の御在ハ坐けるハふりけり又志深里坐ハ於三  
垣神八戸挂須御諸命大物主葦原志許國堅以後自天  
 下於三坂岑ト有る坐於三垣神ハ神名式ハ謂ゆる御  
 坂神社是ハふり八戸挂須ハ御諸ト云ふ發語ハふり八戸

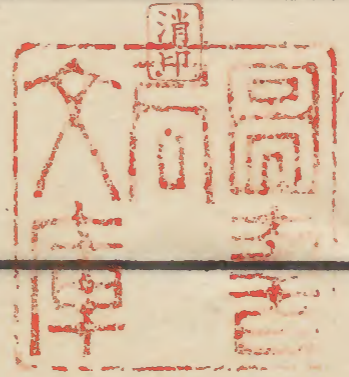
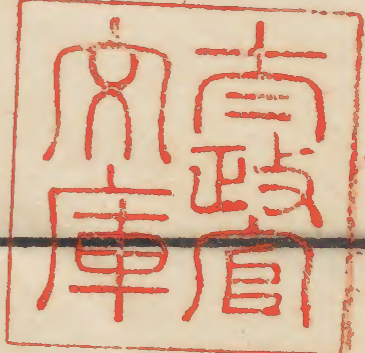


熟田縁起不作假<sub>度</sub>八間一面間<sub>ハ</sub>戸

ハ山城風土記小造ハ尋屋立ハ戸<sub>扉</sub><sup>ハ</sup>有<sub>ル</sub>是<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り  
桂<sub>須</sub>領<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>此<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り  
桂<sub>須</sub>領<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>此<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り  
桂<sub>須</sub>領<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>此<sub>ノ</sub>類<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り  
御事ふる可<sub>ク</sub>其<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>欲<sub>シ</sub>住<sub>ル</sub>於<sub>テ</sub>日<sub>本</sub>國<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>三<sub>諸</sub>山<sub>ノ</sub>故<sub>ニ</sub>即<sub>チ</sub>營<sub>宮</sub>  
彼<sub>レ</sub>處<sub>ニ</sub>使<sub>シ</sub>就<sub>テ</sub>而<sub>シ</sub>居<sub>ル</sub>と書<sub>ハ</sub>れ古<sub>ノ</sub>事<sub>ノ</sub>記<sub>ス</sub>此<sub>ノ</sub>者<sub>ハ</sub>坐<sub>シ</sub>御<sub>諸</sub>山<sub>ノ</sub>上<sub>ニ</sub>神<sub>ト</sub>  
是<sub>レ</sub>と所<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>是<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り次<sub>ニ</sub>大<sub>ノ</sub>物<sub>ノ</sub>主<sub>ト</sub>神<sub>ト</sub>ハ即<sub>チ</sub>其<sub>レ</sub>御<sub>諸</sub>山<sub>ノ</sub>  
後<sub>ニ</sub>鎮<sub>給</sub>ふ大<sub>ニ</sub>己<sub>ノ</sub>貴<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>和<sub>魂</sub>坐<sub>シ</sub>葦<sub>原</sub>志<sub>許</sub>乎<sub>命</sub>ハ  
此<sub>モ</sub>大<sub>ニ</sub>己<sub>ノ</sub>貴<sub>ノ</sub>神<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>亦<sub>モ</sub>名<sub>ヲ</sub>小<sub>ノ</sub>御<sub>在</sub>坐<sub>セ</sub>バ此<sub>ニ</sub>神<sub>ハ</sub>其<sub>レ</sub>ハ  
戸<sub>ノ</sub>桂<sub>須</sub>領<sub>ノ</sub>御<sub>諸</sub>命<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>從<sub>奉</sub>と書<sub>ハ</sub>れ給<sub>ヘ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り國<sub>ノ</sub>堅<sub>キ</sub>以後<sub>ノ</sub>自<sub>ラ</sub>天<sub>ノ</sub>  
下<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>三<sub>坂</sub>岑<sub>マ</sub>ハ其<sub>レ</sub>御<sub>諸</sub>命<sub>ノ</sub>此<sub>ノ</sub>天<sub>ノ</sub>降<sub>リ</sub>と書<sub>ハ</sub>れ給<sub>ヘ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り

り此<sub>レ</sub>傳<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>如<sub>ク</sub>ハ右<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>三<sub>坂</sub>岑<sub>ニ</sub>天<sub>ノ</sub>降<sub>リ</sub>御<sub>在</sub>坐<sub>テ</sub>其<sub>レ</sub>  
より出<sub>雲</sub>國<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>頭<sub>ハ</sub>れさせ御<sub>在</sub>坐<sub>ケ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り下<sub>ニ</sub>三<sub>百</sub>  
九<sub>十</sub>又<sub>四百</sub>三<sub>十五</sub>下<sub>ニ</sub>三<sub>百</sub>九<sub>十</sub>云<sub>ベ</sub>く又<sub>高</sub>野<sub>乃</sub>加<sub>郷</sub>有<sub>リ</sub>高<sub>野</sub>里<sub>坐</sub>祝<sub>田</sub>社<sub>神</sub>  
玉<sub>帶</sub>志<sub>比</sub>古<sub>大</sub>縮<sub>女</sub>玉<sub>帶</sub>志<sub>比</sub>賣<sub>豊</sub>縮<sub>女</sub>と有<sub>ル</sub>此<sub>レ</sub>祝<sub>田</sub>  
社<sub>ハ</sub>上<sub>百</sub>四<sub>十</sub>下<sub>ニ</sub>七<sub>丁</sub>小<sub>ノ</sub>注<sub>セ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り如<sub>ク</sub>揖<sub>保</sub>郡<sub>祝</sub>田<sub>神</sub>社<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>御<sub>神</sub>  
神<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>渡<sub>リ</sub>と書<sub>ハ</sub>れ給<sub>ヘ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り上<sub>百</sub>八<sub>十</sub>下<sub>ニ</sub>二<sub>丁</sub>小<sub>ノ</sub>引<sub>ル</sub>神<sub>前</sub>郡<sub>的</sub>部<sub>里</sub>  
の文<sub>ハ</sub>小<sub>ノ</sub>高<sub>野</sub>社<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>祭<sub>神</sub>を玉<sub>依</sub>比<sub>賣</sub>命<sub>と</sub>申<sub>セ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り合<sub>セ</sub>  
て此<sub>レ</sub>比<sub>古</sub>神<sub>ト</sub>比<sub>賣</sub>神<sub>ト</sub>ハ大<sub>ニ</sub>己<sub>ノ</sub>貴<sub>ノ</sub>命<sub>ノ</sub>妹<sub>妹</sub>二<sub>柱</sub>小<sub>ノ</sub>渡<sub>リ</sub>と書<sub>ハ</sub>れ給<sub>ヘ</sub>る<sub>ハ</sub>是<sub>ハ</sub>り  
上<sub>百</sub>五<sub>十</sub>下<sub>ニ</sub>七<sub>丁</sub>小<sub>ノ</sub>引<sub>ル</sub>  
讚<sub>容</sub>郡<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>文<sub>ハ</sub>小<sub>ノ</sub>大<sub>ニ</sub>己<sub>ノ</sub>貴<sub>ノ</sub>命<sub>ノ</sub>妹<sub>妹</sub>二<sub>柱</sub>各<sub>ノ</sub>競<sub>古</sub>國<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>時<sub>云</sub>くと有<sub>ル</sub>





て各御田を作競ハセ給へれば各其保食神を齋りせ  
 御在り坐て妖神ハ大稻女命と祀給ひ妹神ハ豊稻女  
 命と祀給へるふて揖保郡ふるハ式社ふれども此よ  
 り徒奉るふて甚止事無き所由有と見ゆ其ハ志深里  
 土中所以号志深者射封和氣命御食於此井之時信深  
 貝遊上於御飯苜縁尔時勅云此貝者於阿波国和那散  
 我所食之貝哉故号志深里と有る此ハ蜆貝の飯苜ハ  
 這上れるを見行ハ御在り坐て阿波國ふて前ハ聞  
 食り御事の御在り坐けるを所思り出給ひて詔給へ  
 る意ハ飯ハ彼保食神亦名豊字氣毘賣神の御体とも



